

宮 崎 小 学 校 遺 跡

—宮崎市教育情報研修センター建設に伴う発掘調査報告書—

2002

宮崎市教育委員会

序

宮崎市の教育は、国際化・少子・高齢化・高度情報化の進む社会に即応できる、調和のとれた豊かな人格の形成を目指して推進いたしております。その一環として、宮崎小学校敷地内に「宮崎市教育情報研修センター」を建設する事となりました。本書はその建設に伴い、平成12年度から平成13年度にかけて実施した、宮崎小学校遺跡の発掘調査報告書であります。

宮崎小学校周辺には広島古墳群が存在したという記録があり、調査が望まれる地域でしたが、早い段階から市街化が進んだため困難とされました。しかし、今回の計画によってその契機を得て調査が実現し、市街地の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

宮崎小学校は明治5（1872）年に開校した、市内で最も古く歴史のある小学校です。今回調査対象となった場所には、長く利用されていた校舎が建っていました。宮崎小学校の長い歴史を物語るにふさわしい、質権のある校舎でした。

その校舎の下から、宮崎小学校が出来るよりもずっと前の人々の痕跡が発見されました。この場所に小学校が出来る遙か昔から、この土地に人々が集い生活していたことを思うと、人類が歩んできた歴史の長さや重さを感じずにはいられません。

今回は小学校敷地内での調査ということで、高学年の児童を対象に現地見学会も実施いたしました。実際の調査がどのように行われ、出土した遺物にその場で直接触れることを通じて、郷土の歴史や文化財保護へ关心を持たせる一助となつたと思います。

この調査が子供達はもちろん、学校関係者や地域の方々にも埋蔵文化財への関心を持っていただくなきつかけとなり、学術的にも学校教育や生涯学者の場においても、広く活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に従事していただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

例　　言

1. 本書は（仮称）宮崎市教育・情報研修センター建設にかかる、宮崎小学校遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成13年2月16日から4月17日の間、実施した。
3. 調査体制

調査主体 宮崎市教育委員会 文化振興課

(平成12年度)

總 括 課 長	野間 重孝
文化財係長	永井 淳生
庶 務 主 事	竹野 隆司
調査員 技 師	宇田川 美和
調査補助 嘴 託	川原 愛

(平成13年度)

總 括 課 長	小掠 型
文化財係長	永井 淳生
庶 務 主 任 主 事	竹野 隆司
調査・整理 技 師	宇田川 美和
補 助 主 事	仁尾 忠尊
嘱 託	椎由 美子
嘱 託	佐藤 小夜子
嘱 託	熊田原 被義
嘱 託	河野 賢太郎
嘱 託	川原 愛
嘱 託	門田 奈津子

4. 本書の執筆は、宇田川・川原が行った。
5. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は、宇田川・仁尾・椎・佐藤・熊田原・河野・川原・門田が行った。
6. 現場における写真撮影は宇田川・川原が、遺物写真撮影は宇田川が行った。ただし、航空写真的撮影は有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
7. 本書の編集は宇田川が行った。
8. 自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。
9. 調査において出土した遺物、および調査にかかる図面・写真は宮崎市教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	5
第Ⅱ章 調査の成果	
第1節 調査の概要	11
第2節 A区の調査	11
第3節 B区の調査	25
第4節 C区の調査	39
第Ⅲ章 宮崎小学校遺跡における自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定	41
第2節 プラント・オパール分析	43
第3節 花粉分析	48
第Ⅳ章 まとめ	54

挿図目次

第1図 宮崎小学校遺跡とその周辺	8
第2図 宮崎小学校遺跡構造配置図	9～10
第3図 A区出土遺物（1）	14
第4図 A区出土遺物（2）	15
第5図 A区出土遺物（3）	16
第6図 A区出土遺物（4）	17
第7図 A区出土遺物（5）	18
第8図 A区出土遺物（6）	19
第9図 A区出土遺物（7）	20
第10図 A区出土遺物（8）	21
第11図 A区出土遺物（9）	22
第12図 A区出土遺物（10）	23
第13図 A区出土遺物（11）	24
第14図 B区出土遺物（1）	28
第15図 B区出土遺物（2）	29
第16図 B区出土遺物（3）	30
第17図 B区出土遺物（4）	31
第18図 B区出土遺物（5）	32
第19図 B区出土遺物（6）	33
第20図 B区出土遺物（7）	34
第21図 B区出土遺物（8）	35
第22図 B区出土遺物（9）	36
第23図 B区出土遺物（10）	37
第24図 B区出土遺物（11）	38
第25図 C区出土遺物	40

第26図 プラント・オパール分析結果	46
第27図 プラント・オパール顕微鏡写真	47
第28図 花粉ダイアグラム	52
第29図 花粉写真	53

表 目 次

第1表 プラント・オパール分析結果	45
第2表 花粉分析結果	51
第3表 出土土器観察表（1）	57
第4表 出土土器観察表（2）	58
第5表 出土土器観察表（3）	59
第6表 出土土器観察表（4）	60
第7表 出土土器観察表（5）	61
第8表 出土土器観察表（6）	62
第9表 出土土器観察表（7）	63
第10表 山上石器計測表	64

図 版 目 次

図版1 宮崎小学校遺跡全景（西から）	65
図版2 △区調査着手前	66
図版3 A区1号溝状遺構遺物出土状況	66
図版4 A区2号溝状遺構遺物出土状況	66
図版5 A区1号溝状遺構炭化物および遺物山上状況	67
図版6 A区完掘状況	67
図版7 調査風景	67
図版8 B区調査着手前	68
図版9 B区1号溝状遺構遺物出土状況（1）	68
図版10 B区1号溝状遺構遺物出土状況（2）	68
図版11 B区遺物山上状況（1）	69
図版12 B区遺物出土状況（2）	69
図版13 B区遺物出土状況（3）	69
図版14 B区完掘状況	70
図版15 C区調査着手前	70
図版16 C区完掘状況	70
図版17 出土遺物（1）	71
図版18 出土遺物（2）	72
図版19 山上遺物（3）	73
図版20 出土遺物（4）	74
図版21 出土遺物（5）	75

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本遺跡は宮崎市旭1丁目4番1号（宮崎小学校敷地内）に所在する。宮崎市では、宮崎小学校敷地内北側（旧北校舎跡地）に「宮崎市教育情報研修センター」の建設計画が持ち上がり、平成12年11月に宮崎市教育委員会学校教育課から文化振興課へ、当該地の埋蔵文化財の有無についての照会があった。

文化振興課は、建設予定地周辺には広島古墳群が存在したことから、開発に先立ち試掘調査が必要である旨回答した。平成12年11月27日に行った試掘調査では、9本のトレンチを設定したが、ほとんどが北校舎の建設に伴って著しく擾乱されており、遺構・遺物は全く確認できなかった。しかし、西側に設定した3本のトレンチから弥生時代中期の土器片が多数確認された。そのため工事着手前に本調査が必要であるという結論に達し、その旨を学校教育課に通知、平成13年1月31日付けで「文化財保護法57条の3第1項」の規定による埋蔵文化財の発掘の届出があった。

本調査は、平成13年2月16日から平成13年4月17日の期間実施した。

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

宮崎市の市街地は大淀川下流に広がる沖積地に立地しており、その中に点在する微高地上に古くから集落が営まれている。宮崎小学校はその微高地の南端にあたると思われ、現在でも宮崎小学校から南（大淀川）に向けて緩やかに下っているようである。

宮崎小学校は市内の小学校としては最も古く、周辺には県庁や市役所、県警本部などの中心施設がある。そのためかなり早くから市街化が行われた為、周辺での埋蔵文化財の調査例はほとんどない。旧石器時代の遺跡は確認されておらず、縄文時代についても、宮崎小学校から北西へ約2kmの宮崎大学教育学部跡地が、縄文時代の散布地として知られているのみである。

弥生時代の遺跡としては、市街地の北東部、宮崎小学校遺跡より北東2.3kmに中無山遺跡がある。中無山遺跡では構造遺構が検出されたが、工事中の発見であったため、検出されたのはごく一部であった。遺物としては鉢形土器や壺・甕・高杯が多く、石包丁や磨製石器も出土している。高杯が非常に多く、壺形土器の底部に円穿を持つものが見られることなどから、単なる聚落跡ではなく、祭祀的な性格が強いものだと思われる。

また、宮崎小学校遺跡から北東2.5kmには櫛遺跡があり、弥生時代前期の積石墓9基と小児用櫛墓3基が検出され、北部九州土器文化の伝播の過程において、いち早くその文化を取り入れている遺跡であるといえよう。

そのほかにも弥生時代～古墳時代にまたがる散布地として、上無田堀遺跡・江田原第2遺跡・

柿本遺跡などが本遺跡の半径3km以内に存在する。

古墳時代になると、周辺には多数の古墳が見られる。大正4(1915)年に谷口章蔵が著した『神都宮崎』という本には、宮崎小学校の北一帯に「広島古墳群」と呼ばれる古墳群があり、古墳の場所や出土遺物が記されている。古墳は市街化に伴って消滅し、現在では古墳として確認できるものは存在しない。前述の本には古墳の場所を記す記述が5つあり、少なくとも5基は存在していたと思われるが、正確な数や墳形・規模などは不明である。しかし現存する数少ない遺物には、内行花文鏡や画文帶神獸鏡・直刀・杏葉などがあり、その内容からかなり有力な首長が周辺に存在したことが窺える。

また広島古墳群のほかにもいくつか古墳が存在する。宮崎小学校遺跡から北西には、前方後円墳3基、円墳6基からなる穂古墳群がある。測量および発掘調査がほとんど行われていないため、その詳細は不明な点が多い。しかし1号墳については、宮崎大学考古学研究室により平成6年度に測量調査、平成12年度に発掘調査が行われており、それらの結果から纏向型類型の前方後円墳と見られている。1号墳から北0.8kmの江田原第3遺跡ではTK208段階併行の円墳の周溝が確認され、土師器の高杯が14点、甕1点、壺3点、塼2点、須恵器の甕3点が出土しており、周溝の推定径は9.2~10.2mを測る。

また、当遺跡の南1.8kmには県指定史跡赤江町古墳があり、1基は市街化に伴い消滅したが、高さ4.7m、径43mの円墳1基(福長院塚古墳・霧島塚)が残っている。この古墳はかなり古くからその存在が知られており、『日向纂記』などによると、文政年間(1818~1830)と明治時代(1868~1912)の2度にわたって盜掘を受けており、そのいずれかにおいて剣・鉄鏃・鎧などが出土したというが、それらの所在は分かっていない。他にも宮崎小学校の南西1.5kmには天神山横穴があったというが、現在は確認できない。

ほかに古墳時代の遺跡としては、宮崎小学校から北東へ1kmに浄土江遺跡がある。浄土江遺跡は昭和52~54年と平成4年の4次にわたって調査されており、住居址33軒とそれに伴う構造遺構、それらに伴って土師器・須恵器が出土しており、古墳時代後期~奈良時代の集落跡であることが知られている。

浄土江遺跡に隣接する遺跡として、浄土江遺跡の東1.3kmのところに大町遺跡が存在する。大町遺跡は平成8年に宮崎市教育委員会によって調査され、弥生時代中期~後期初頭の周溝状遺構、古墳時代後期の堅穴住居址61軒、住居の床面から掘り込まれた地下式横穴状遺構3基が検出され、主に6世紀後半~7世紀初頭にピークを持つ集落の跡が確認された。

さらに、大町遺跡から0.8km北東には平成9年度と平成12年度の2回にわたって調査された北中遺跡がある。平成9年度の調査では、堅穴住居址や堅穴状遺構、溝状遺構、近世墓などが検出され、それらに伴って土師器の甕や鉢、須恵器や陶器が出土していることから、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であると考えられる。2基検出されている堅穴状遺構のうち1基からは多量の鉄滓が出土しており、この堅穴状遺構及びその周辺において製鉄にかかる施設があつたことを示唆している。

平成12年度には、平成9年度調査分の東隣の調査を行った。堅穴住居址16軒、溝状遺構10条、

土坑1基、地下式横穴墓10基が検出され、整穴住居はおおむね5世紀後半から6世紀前半に比定されている。地ト式横穴墓は平入りプラン5基、妻入りプラン3基、小型でプランが不明なものが2基確認され、出土須恵器からTK43段階、TK209段階に比定される。

なかでも、最も大型で多くの遺物が出土した6号地下式横穴墓は多数の須恵器の他に鉄劍や耳環も共伴しており、古墳時代後期の沖積地における文化解明の一端を成す調査となった。

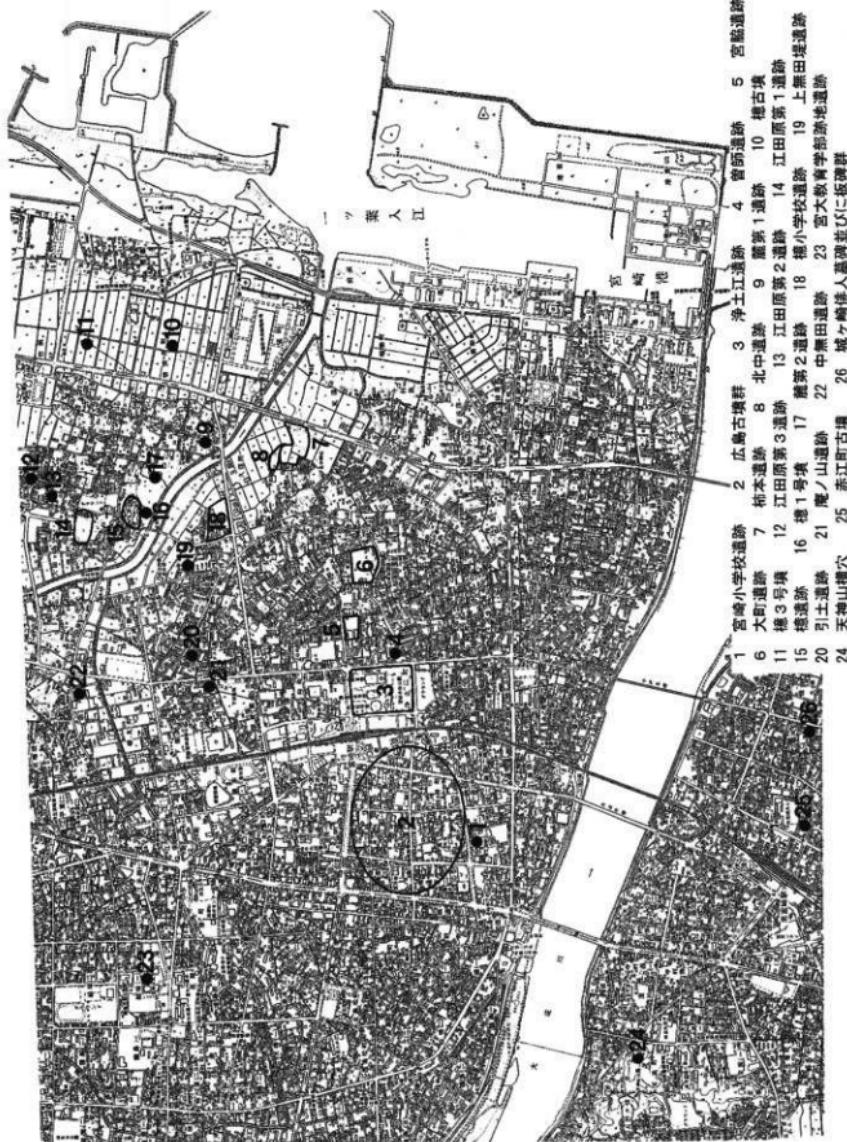
ほかにも浄土江遺跡の周辺には櫛小学校遺跡・菟第1遺跡・菟第2遺跡・曾師遺跡などの古墳時代の散布地が見られる。

宮崎小学校遺跡の1.3km北東には、平成8年に調査され溝状遺構8条と布瓶土器が出土した宮脇遺跡や、北東2.7kmには奈良・平安時代の住居跡が確認されている江田原第1遺跡がある。

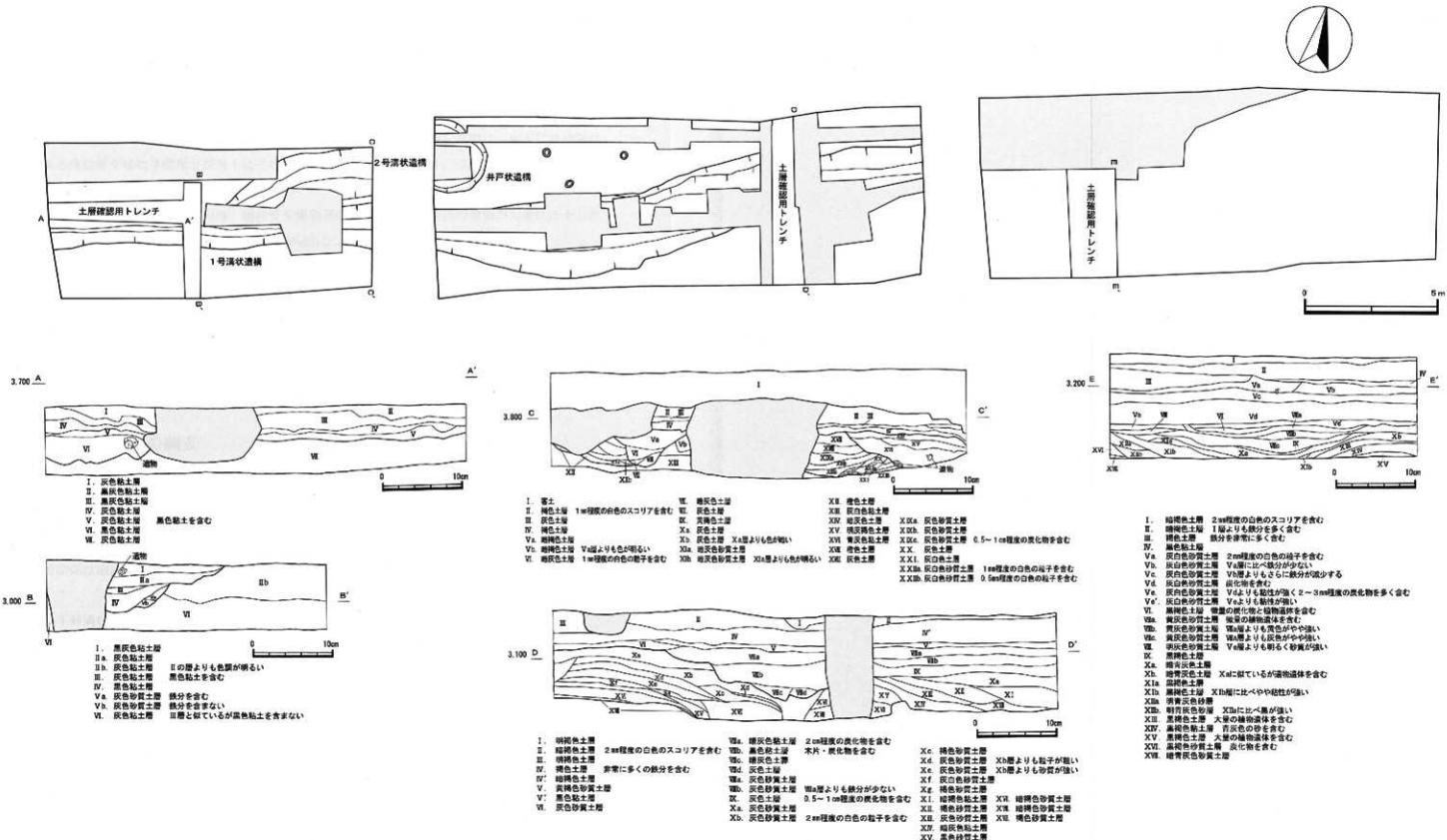
また宮崎小学校から南へ1.9kmの「城ヶ崎」と言わされた地域では、江戸時代から明治時代初期にかけて、俳句を中心とした町民文化が栄えた場所で、多くの俳人を輩出し「城ヶ崎俳壇」と呼ばれていた。現在は俳人達の墓碑25基及び石経塚3基が集合しており、「城ヶ崎俳人墓地」として市指定史跡となっている。また同墓地内には数基の板碑があり、嘉慶3(1328)年と正和3(1314)年と見られるものがあり、県内でも古式の板碑になると考えられる。

【参考文献】

- 宮崎県 1989 『宮崎県史 資料編 考古1』
- 宮崎県 1993 『宮崎県史 資料編 考古2』
- 宮崎市教育委員会 1990 『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書 II』
- 宮崎市教育委員会 2000 『宮崎市の文化財』
- 宮崎市教育委員会 1981 『浄土江遺跡』
- 宮崎市教育委員会 1993 『浄土江遺跡 II』
- 宮崎市教育委員会 1989 『柿木原地下式横穴墓56-1号・江田原第1遺跡』
- 宮崎市教育委員会 1999 『北中遺跡』
- 宮崎市教育委員会 1998 『大町遺跡』
- 宮崎市教育委員会 2002 『江田原第3遺跡』
- 宮崎市教育委員会 2002 『北中遺跡 II』



第1図 宮崎小学校道跡とその周辺



第2図 宮崎小学校遺跡 遺構配置図 (□は擾乱)

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回調査の対象となった場所はもともと宮崎小学校の校舎が建っていた場所で、校舎を取り壊して更地にした後駐車場として利用されていた。試掘調査を実施した際に、地下には校舎に係る埋設管や建物基礎などが地下にそのまま残っている状態であり、ほとんどが旧校舎の建設に伴い大きく搅乱されていた。

しかし対象地の中央北半分は、埋設管や建物基礎の下から弥生時代の遺物が大量に出土したことから、開発対象面積2620m²のうち、300m²について本調査を実施した。

表土剥ぎ及び本調査に際しても、調査対象区域内に残る大量の建物基礎や埋設管、マンホール等が障害となつた。また、すでに試掘調査の段階で大量の遺物が出土したために実際にどの深さまで包含層が続いているのかが確認されていなかつたため、廃土の処理や作業効率も考えて、調査対象地をA区・B区・C区の3区に分けて調査を行い、それぞれにおいて土層確認用のトレンチを設けた。

第2節 A区の調査

A区においては、調査区の約1/3が下水道管や校舎の基礎により激しく搅乱されていたが、それらの中や校舎基礎の下から溝状遺構が2条検出された。1号溝状遺構はB区に続くものと考えられる。2号溝状遺構は1号溝状遺構から途中で分岐するようだが、1号溝状遺構との先後関係は確認できなかつた。またその続きにおいてもB区では確認できなかつた。

● 1号溝状遺構

深さ30~60cm、最も深い所で62.5cmを測る。東西に流れる溝で、十層確認用トレンチの東で2号溝状遺構と分岐する。プランの半分が下水道管によって失われており、正確な溝の幅や深さなどは分からぬ。また、A区東壁の土層断面図を見ると、少なくとも2回は掘りかえられているようである（第2図参照）。

また、A区の調査区西壁付近で炭化物が出土した（「第Ⅲ章 自然科学分析の結果」参照）。

A区のほとんどの遺物がこの遺構の埋土から出土している。

● 2号溝状遺構

深さ10~25cm、最も深い所で28.9cmを測る。東西に流れる溝で、1号溝状遺構と分岐しているが、分岐点と思われる部分がマンホールや下水道管によって搅乱されており、1号溝状遺構との先後関係は不明である。またA区東壁の土層断面図を見ると、こちらも少なくとも2回は掘りかえられているようである。

この遺構は一部しか確認されていないため全体像がつかめないが、確認できた範囲では、マンホールの北側で遺物の密度が高く、かなり集中して出土した。この遺構から出土した遺物は5・6・15・16・19・20・22・23・28・33・35・39・46・48・51・55・58・59・67・69・72・73・78・80・82・85・87・92である。

●出土遺物

1～58は甕である。1～31は口縁部がL字に屈曲している。3は口縁部が緩くL字に外反する。9は胴部上位に1条の沈線と櫛描波状文を施した後、ナデているようである。10は口縁部が短くL字に外反し、胴部に1条の沈線を施す。11は5条の沈線とその下に櫛描波状文を施す。12は口縁部下に連続した指頭痕が見られる。

13は底部でスヌが付着している。12と同一個体だと思われる。14は口縁部に刻み目を施し、頸部には貼付突帯を施した後に突帯の上に連続した指頭痕を残す。15は口縁部下に断面三角形の貼付突帯を施し、その上から刻み目を施す。16・17は口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を施す。18・19は口縁部下に断面三角形の突帯を貼り付けた後、突帯の上に連続した指頭痕を残す。口縁部の内側をつまんでいる。20は口縁部下に断面三角形の貼付突帯を施した後、刻み目を施す。21～26は胴部上位に断面三角形の貼付突帯が3条施されている。21は口縁部の内側をわずかにつまんでいる。27は断面三角形の貼付突帯が2本しか見られないが、同様のものだと思われる。28も同様に胴部上位に断面三角形の貼付突帯が3条施されており、口縁部真下に穿孔がある。29は胴部に4条の断面二角形の貼付突帯が施されており、口縁部にも断面二角形の貼付突帯が2本見られる。30は口縁部下に断面三角形の貼付突帯が1条残存しており、口縁部には3本の刻み目が見られる。31は胴部中位に断面三角形の貼付突帯を2条施し、その上に刻み目を施す。口縁部の内側をわずかにつまんでいるようである。43は貼り付けられた口縁部が剥がれたものであろう。口縁部の下に2条の沈線が施されている。

32・33は口縁部が緩やかに外反する。32は口縁部が緩く短く外反する。33は32に比べると、口縁部がやや立ち上がり気味である。

34～42は口縁部が直立する。34は口縁部の下に断面三角形の突帯を1条貼り付け、上から刻み目を施す。35は口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を施す。36～38は34と同様、口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を施し、その上から刻み目を施す。37はスヌが付着している。39・40は口縁部の下に断面三角形の突帯を2条貼り付け、その上から刻み目を2条施す。41・42は口唇部に刻みを施し、口縁部下に断面三角形の貼付突帯を施した後、刻み目を施す。41はスヌが付着している。43は貼り付けられた口縁部が剥がれたものであろう。口縁部の下に2条の沈線が施されている。

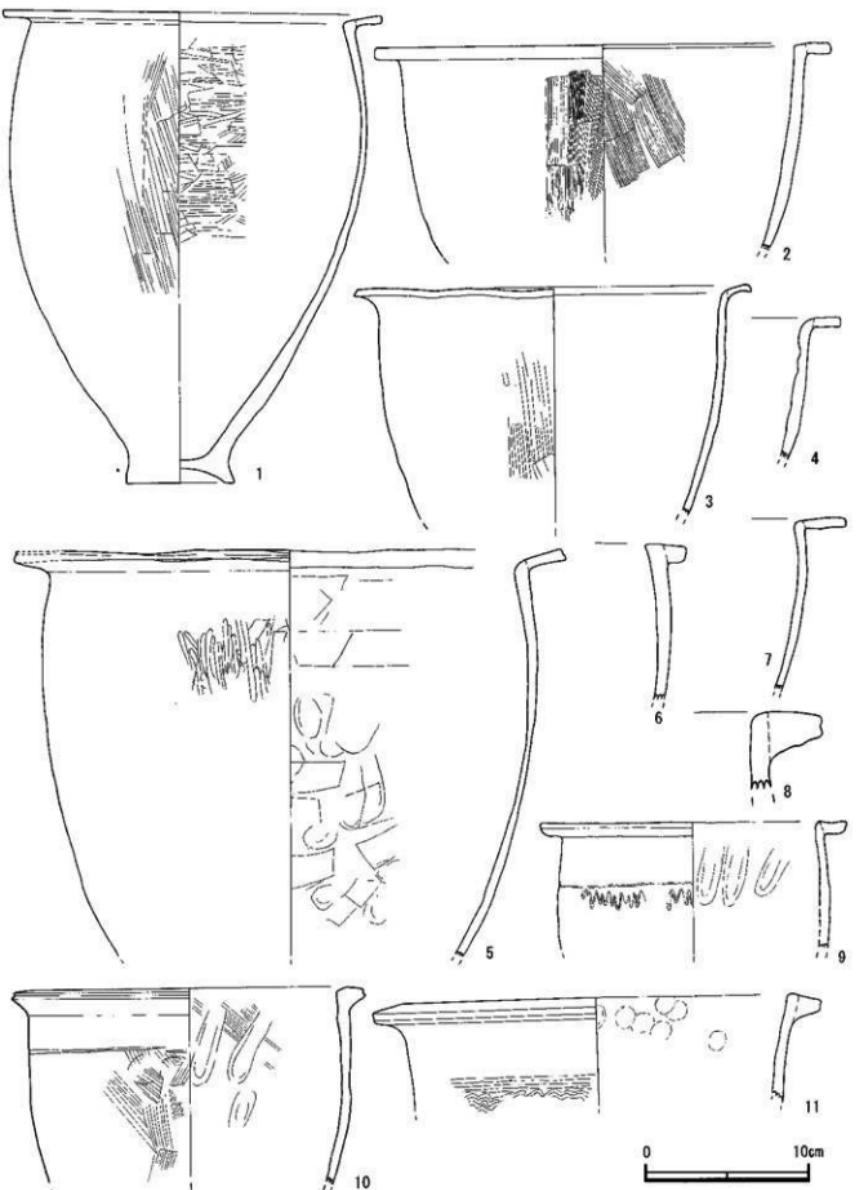
44～58は底部である。44～48は平底を呈する。44・45は底部上位がわずかにくびれて胴部に向けて開く。49～54はやや上げ底を呈する。48は底部上位がくびれ、胴部に向けて徐々に開く。最大径を口縁部に持つ。49～53は底部中位がくびれている。54はスヌが付着している。55～58は上げ底を呈する。57・58は底部上位がくびれている。

59～84は壺である。口縁部は緩やかに外反する。60は頸部に1条、胴部上位に2条の断面三角形の突帯が貼り付けられている。胴部中位に最大径を持つ。61～64は口縁部がゆるいL字に

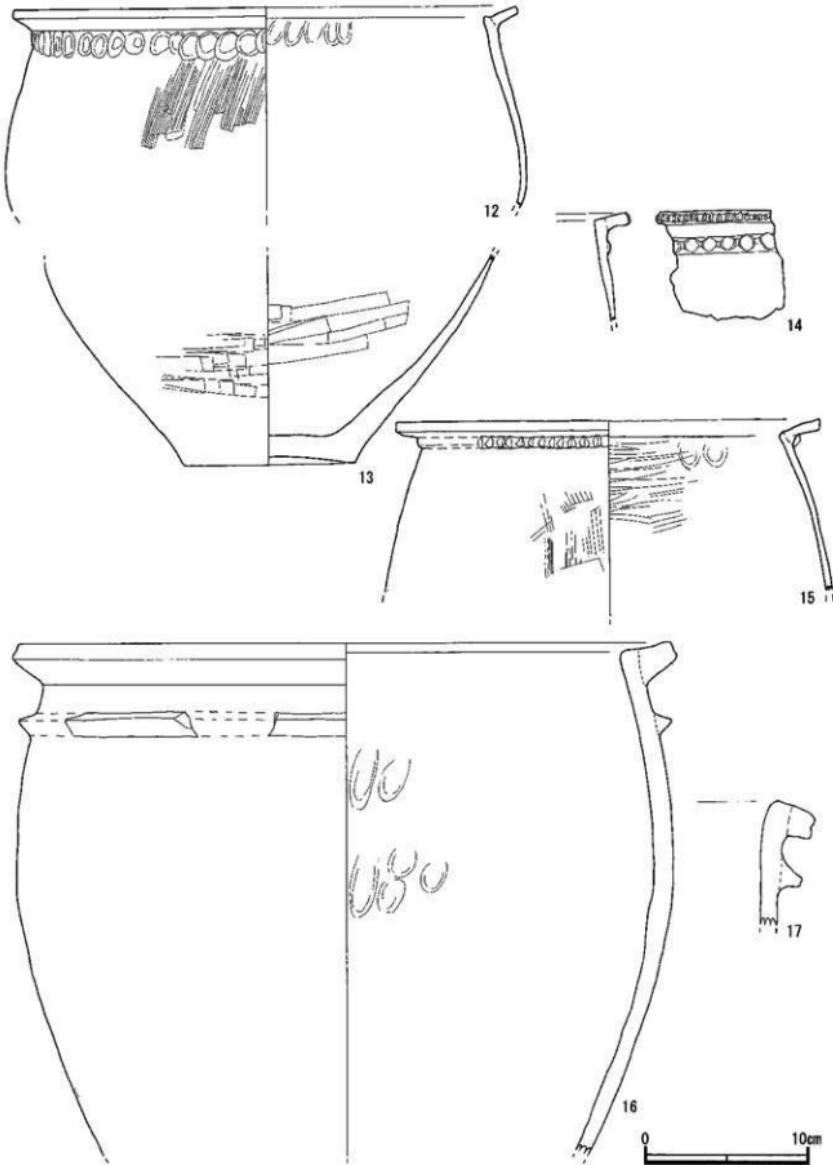
外反する。61・63・64は口縁部内側をわずかにつまむ。65は口縁端部をつまみ、その下に断面三角形の突帯が貼り付けられている。66は口縁部に4本の刻みを施す。67は口縁部に10本を1単位とした刻みが2ヶ所に見られる。口縁部の残存が1/3程度だが、おそらく口縁部全体に刻みがあったものと思われる。68は頸部が強く屈曲し、口縁部に面を持ち、その部分に連続して刻みを施す。頸部に断面三角形の貼付突帯を施す。69は壺の頸部で、豆粒状の貼付浮文を施す。一部しか残存していないが、剥離した痕跡が見られるため、もともとは連続して施されていたものと思われる。70は肩部もしくは胴部の一部で、横方向に2条、縦方向に1条の断面三角形の貼付突帯を施す。71は肩部から胴部にかけての破片で、肩部に2つの豆粒状の貼付浮文を施す。72は肩部から胴部下半にかけての破片で、肩部に3本の沈線を施す。73は胴部上半の破片で、沈線が施されている。74は胴部中位付近で、もっとも張った部分に斜めの刻み目が2段施されている。75は肩部付近で、上から櫛描波状文・沈線・櫛描波状文を施す。76は肩部と思われる部分で、浅い沈線を挟んで2段の竹管文を施す。77は頸部から胴部にかけての破片で、胴部には断面三角形の貼付突帯を施し、胴部上位に断面三角形の貼付突帯を施し、その上から刻み目を施す。79～81は底部で、79～81は平底を呈する。82は上げ底を呈する。83・84はやや上げ底を呈する。83は底部に網代痕を残す。

85・86は高坏である。85は脚上部で、かなり風化しているが3条の断面三角形の貼付突帯を施す。86は脚部で、脚部に2ヶ所の穿孔が見られ、脚上部に断面三角形の貼付突帯を施す。

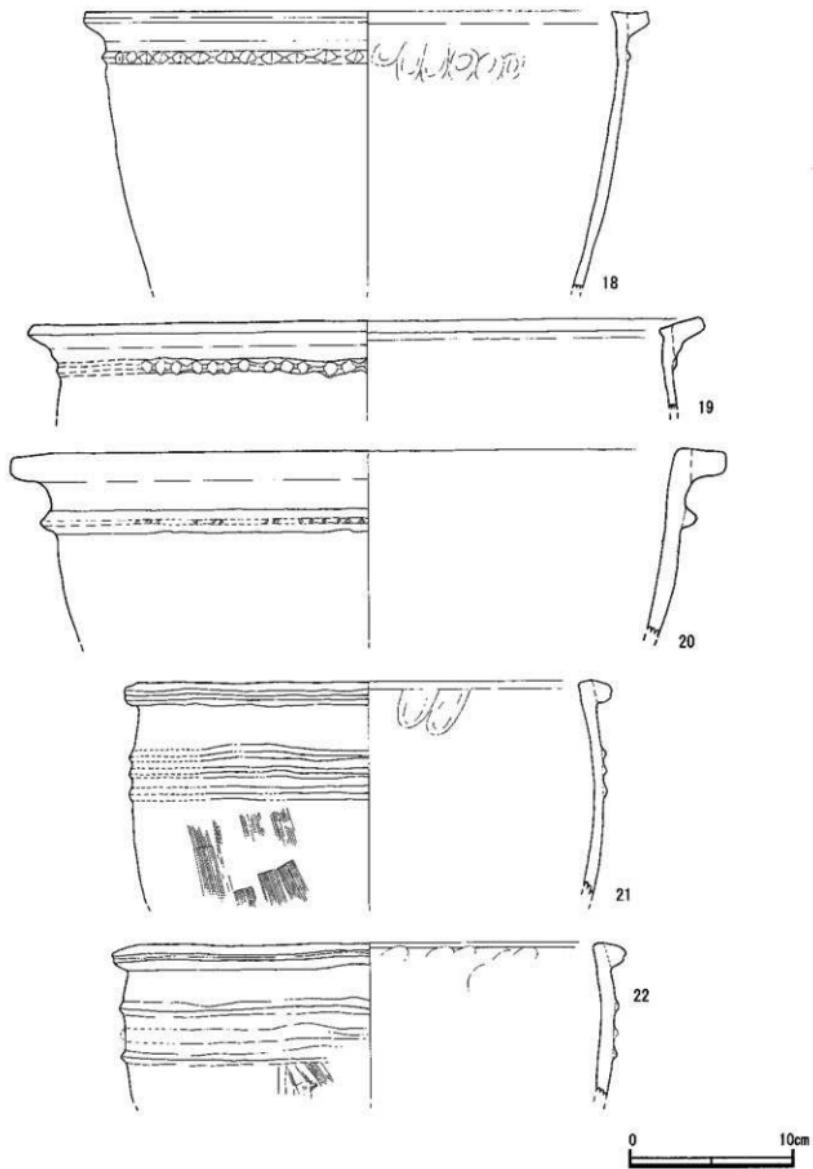
87は平基式の磨製石礫、88は凹基式の磨製石礫である。89は石製紡錘市の木製品である。全体的に擦痕が見られ、中央に穿孔の痕が見られるが貫通していない。90は打製石斧の一部か。91は礫石である。92は磨製石斧の一部である。



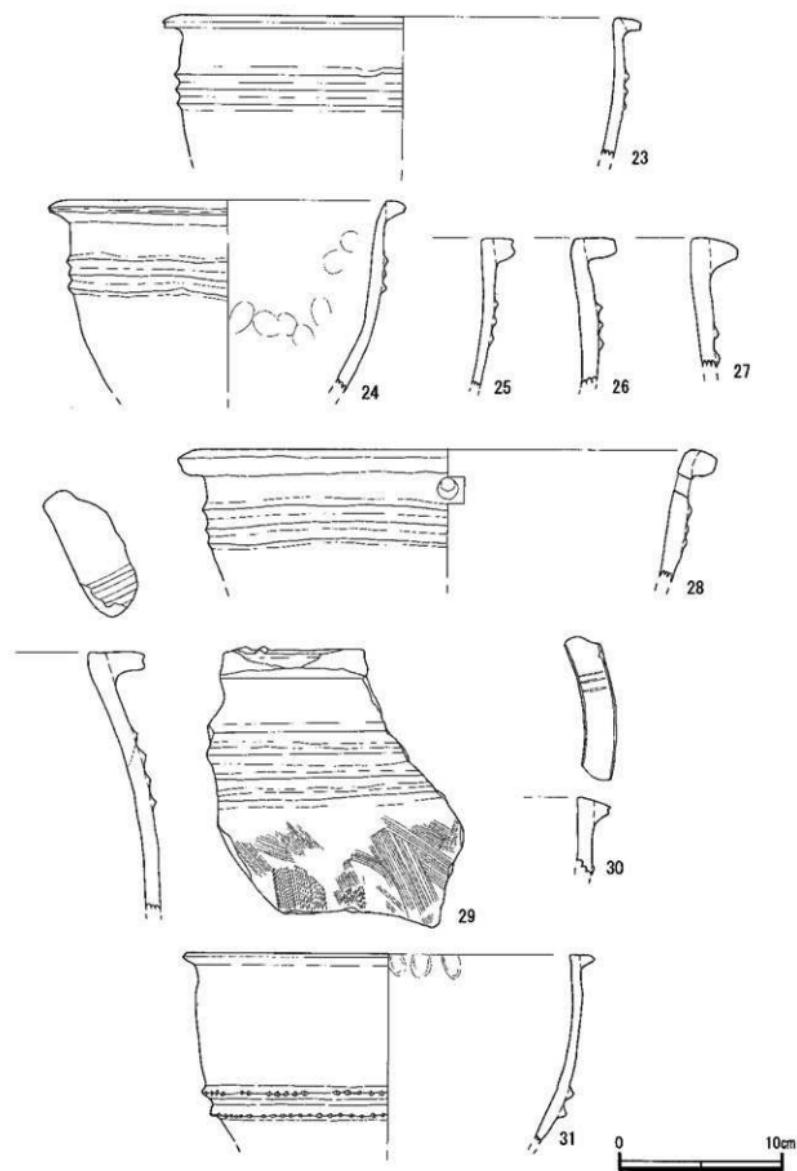
第3図 A区出土造物(1)



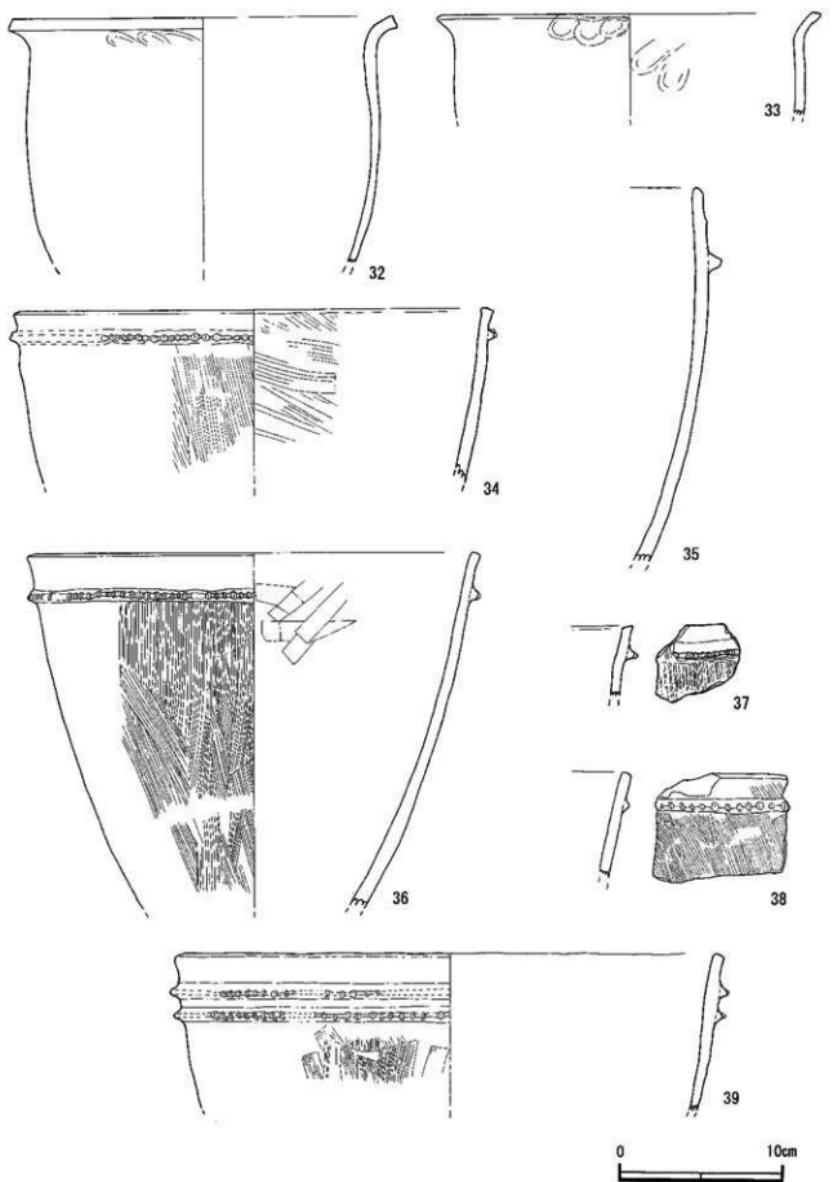
第4図 A区出土遺物(2)



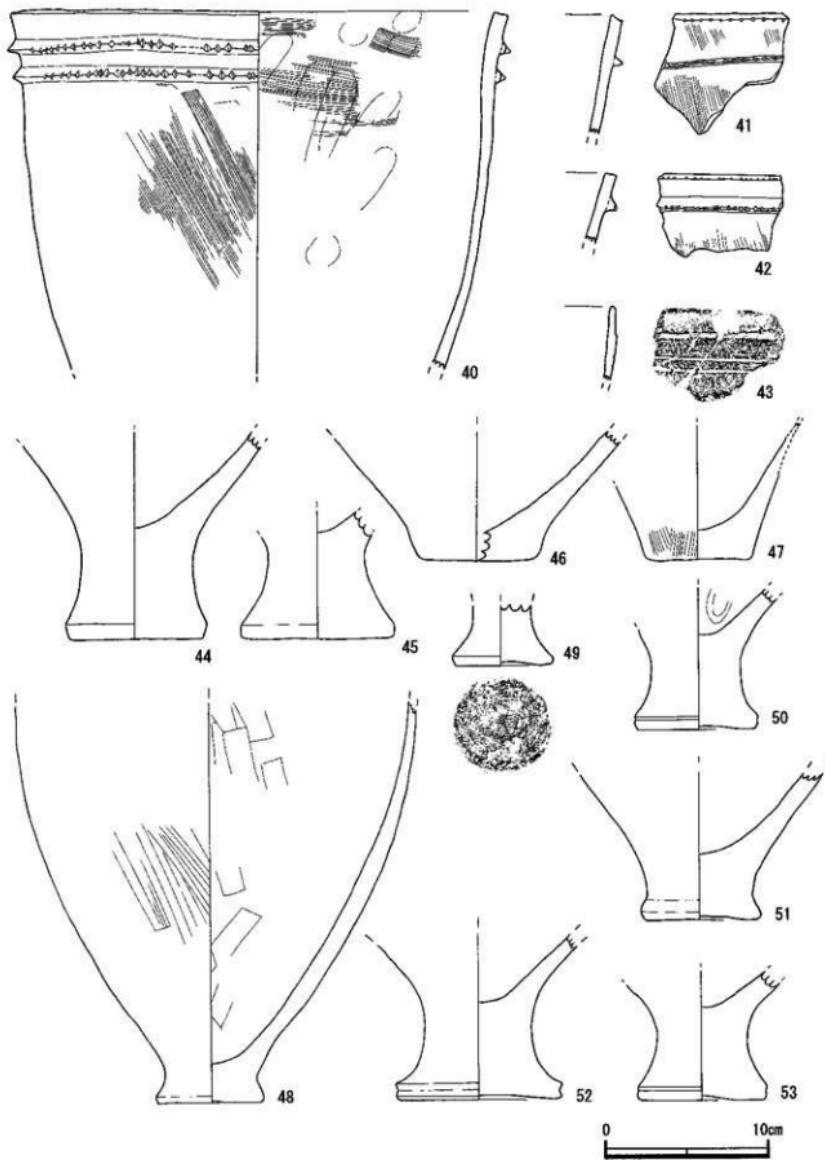
第5図 A区出土遺物(3)



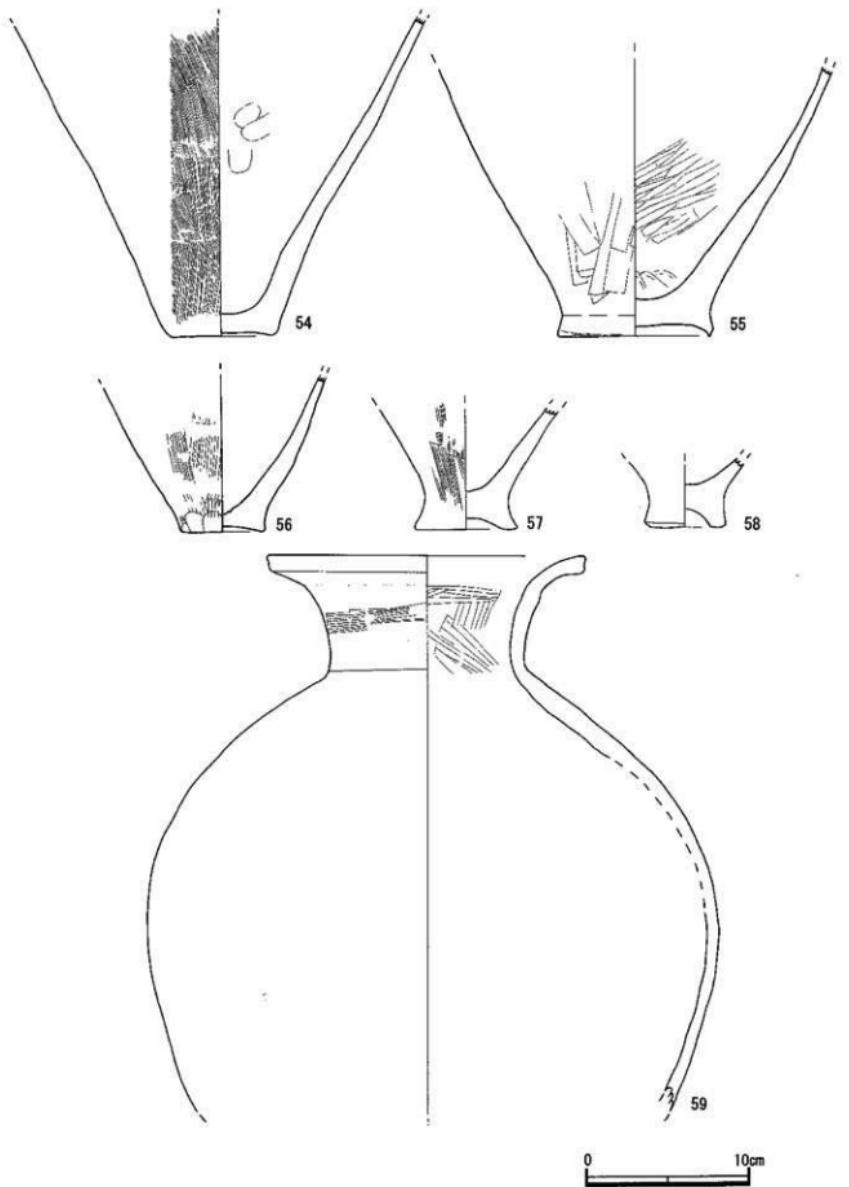
第6図 A区出土遺物(4)



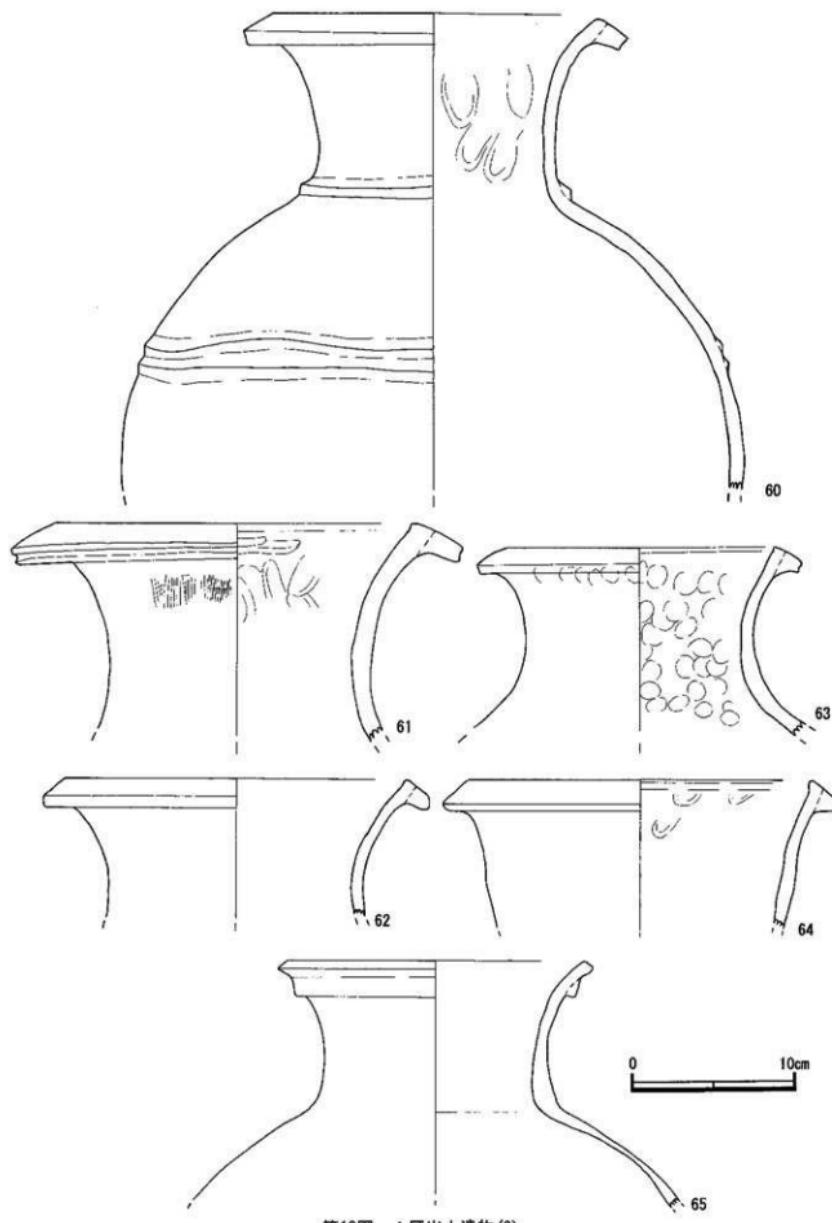
第7図 A区出土遺物(5)



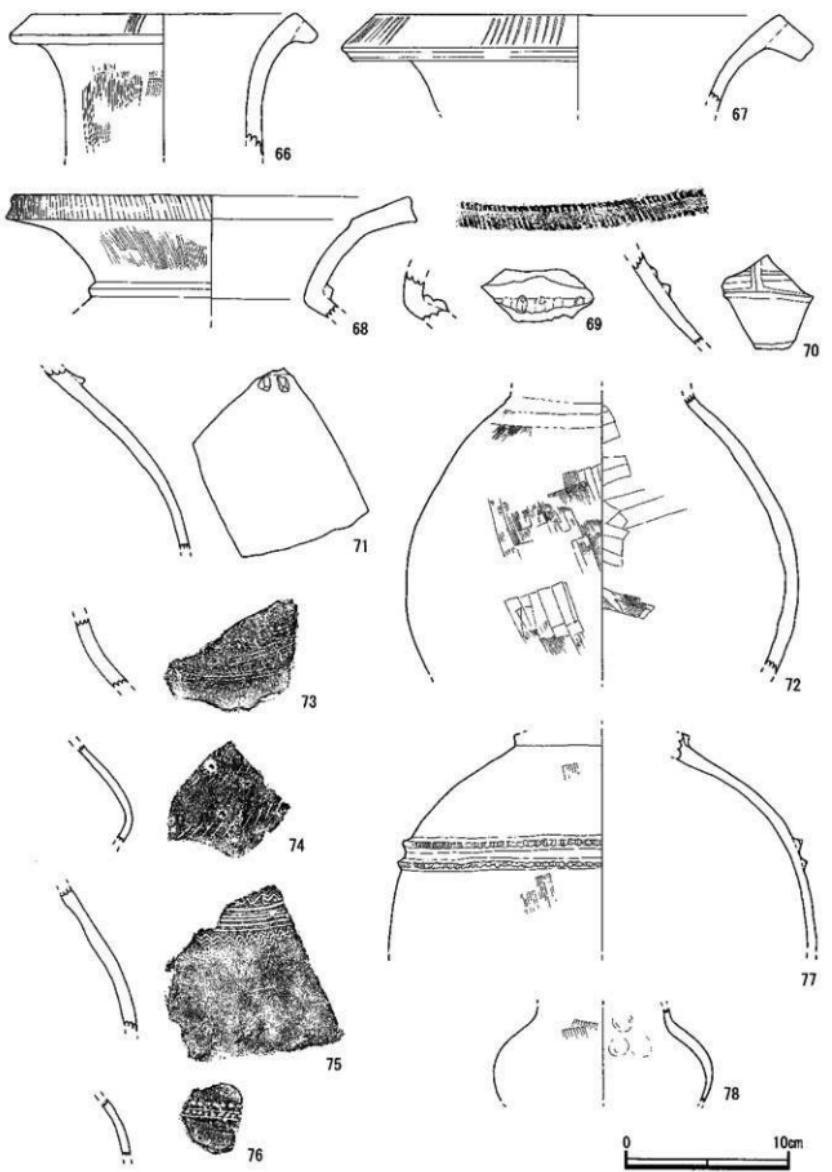
第8図 A区出土遺物(6)



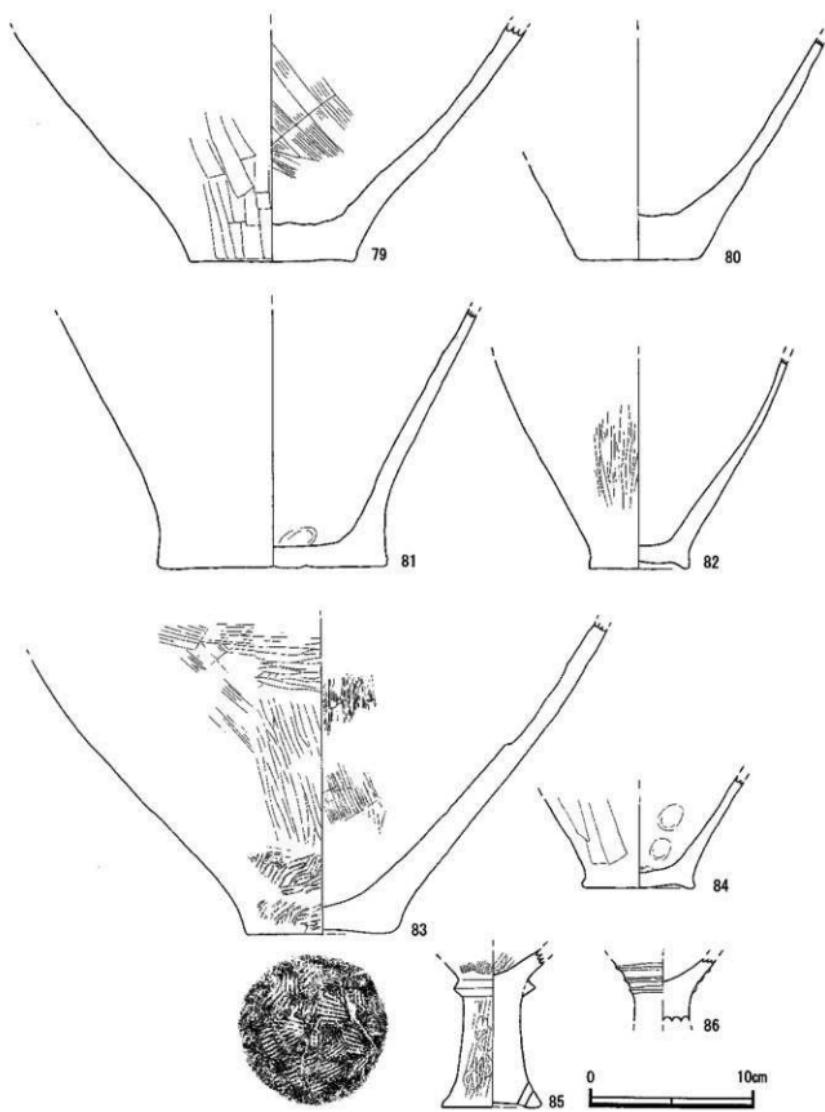
第9図 A区出土遺物(7)



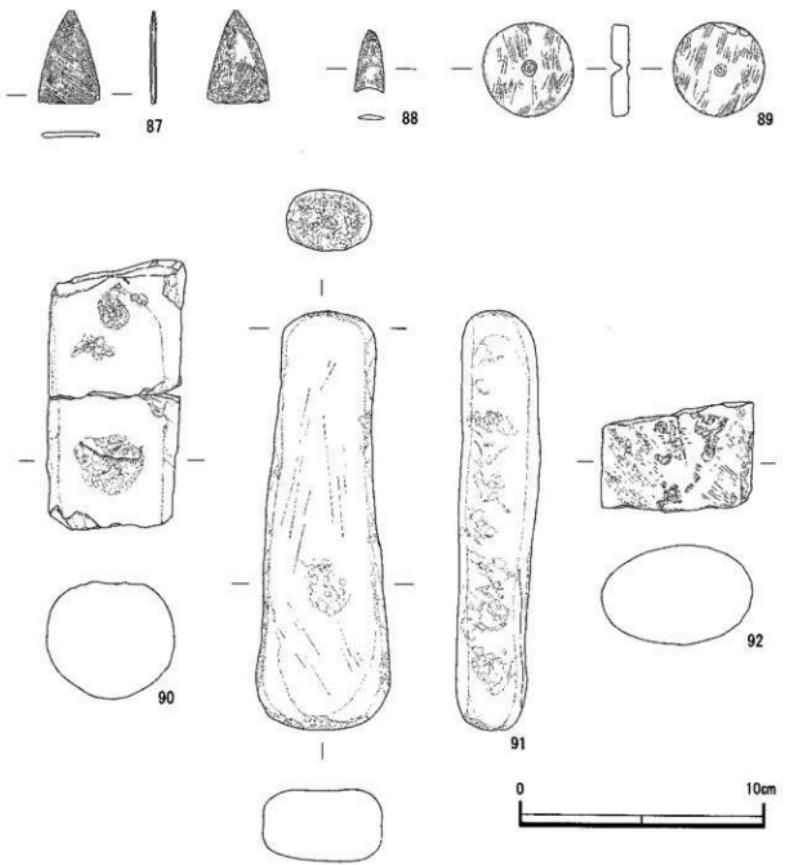
第10図 A区出土遺物(8)



第11図 A区出土遺物(9)



第12図 A区出土遺物(10)



第13図 A区出土遺物(11)

第3節 B区の調査

B区においては、マンホールや下水管等により、調査区の1/2弱が擾乱されていたが、A区の1号溝状造構の続きと考えられる溝状造構1条と、井戸状造構、ピット3基が検出された。

●溝状造構

幅2.5m、深さ15~30cm、最も深い所で33.8cmを測る。A区の1号溝状造構に続くものと思われる。溝状造構の上にはマンホールや配管等による擾乱が多く、プランの半分以上が失われており、正確な幅や深さは不明である。

●井戸状造構

直径2.7m、深さ約40cmを測る。マンホールによってプランの半分以上が失われており正確なプランやサイズは不明で、底面までは完掘できなかった為、造構本来の深さも不明である。

この造構から出土した遺物は107・112・150・179である。

●ピット

ピット1は34cm×24.6cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。ピット2は27cm×22.5cmの楕円形を呈し、深さ15.6cmを測る。ピット3は26.3cm×23.6cmの楕円形を呈し、深さは15.2cmを測る。いずれのピットからも遺物は出土していない。柱穴の可能性もある。

●出土遺物

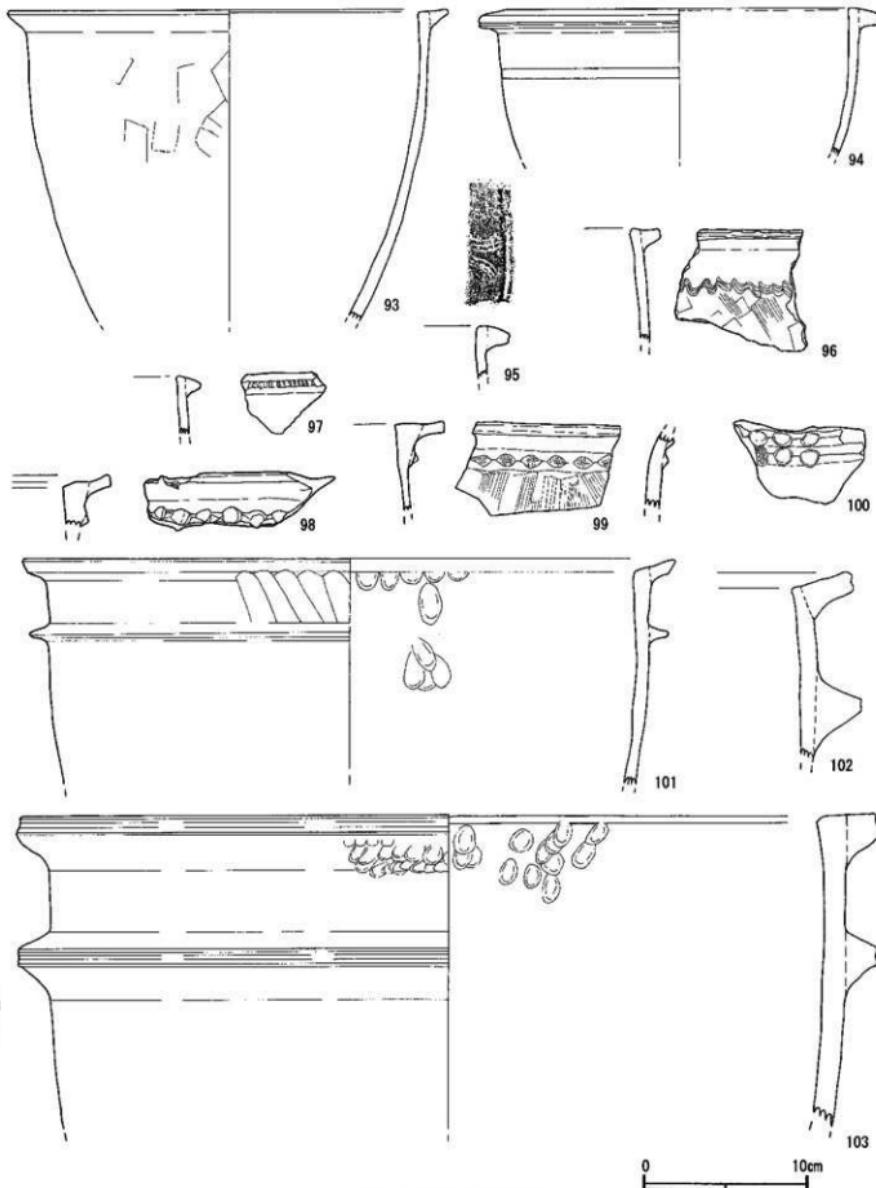
93~129は甕である。93~112は口縁部がL字に屈曲する。94は肩部上半に2条の沈線が施されている。95は口唇部に3本単位の重弧文状の沈線を左右対称に施されている。96は肩部上半に櫛描波状文が施されている。97は口縁部に刻み目を施す。98・99は頸部に1条の断面三角形の貼付突帯を施した後、刻み目を施している。刻み目内に平織状の組織痕が観察される。100は断面三角形の貼付突帯が2条施されている。刻み目内には平織状の組織痕が確認できる。101~103は口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を施す。104は口縁部の下に断面二角形の貼付突帯が5条施されている。105は口縁部に3条、口縁部下に1条の貼付突帯が残っているが、周囲に突帯が剥離した痕跡が残っており、もともとは口縁部および口縁部下全体に貼り付けられていたものと思われる。106は口縁部に8個の刺突文が施されている。107は105同様、口縁部に断面三角形の貼付突帯が2条見られるが、こちらは一部にのみ貼り付けられたものと思われる。108は口縁部に9本の刻み目が見られ、口縁部の下には断面二角形の貼付突帯が2条残っている。109は口縁部がゆるく外反する。110・111は口縁部がL字に屈曲し、口縁部の下に断面三角形の貼付突帯が3条施されている。110はその下に櫛描波状文を施す。112は口縁部に刻み目を施し、口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を施した後、刻み目を施す。113~121は口縁部が直立する。113~115は口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を2条施した後、刻み目を施す。

116・117は口唇部と口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を施した後、刻み目を施す。118・119は口唇部に刻み目を施し、口縁部の下に断面三角形の貼付突帯を施した後、刻み目を施す。120は口唇部に浅い刻みを施し、口縁部の下に断面半梢円形の貼付突帯を施した後、刻み目を施す。121は口縁部の下に断面台形の貼付突帯を施した後、刻み目を施す。スヌが付着している。122は胸部の一部で、豆粒状の貼付浮文が2つ残存しているが、剥離した痕跡が見られるため、もともとは連続して施されていたものと思われる。123～129は底部である。123・124は平底を呈する。123は底部中位がくびれている。125はわずかに上げ底を呈し、胸部中位がくびれている。126～129は上げ底を呈する。126・127は胸部中位がくびれている。

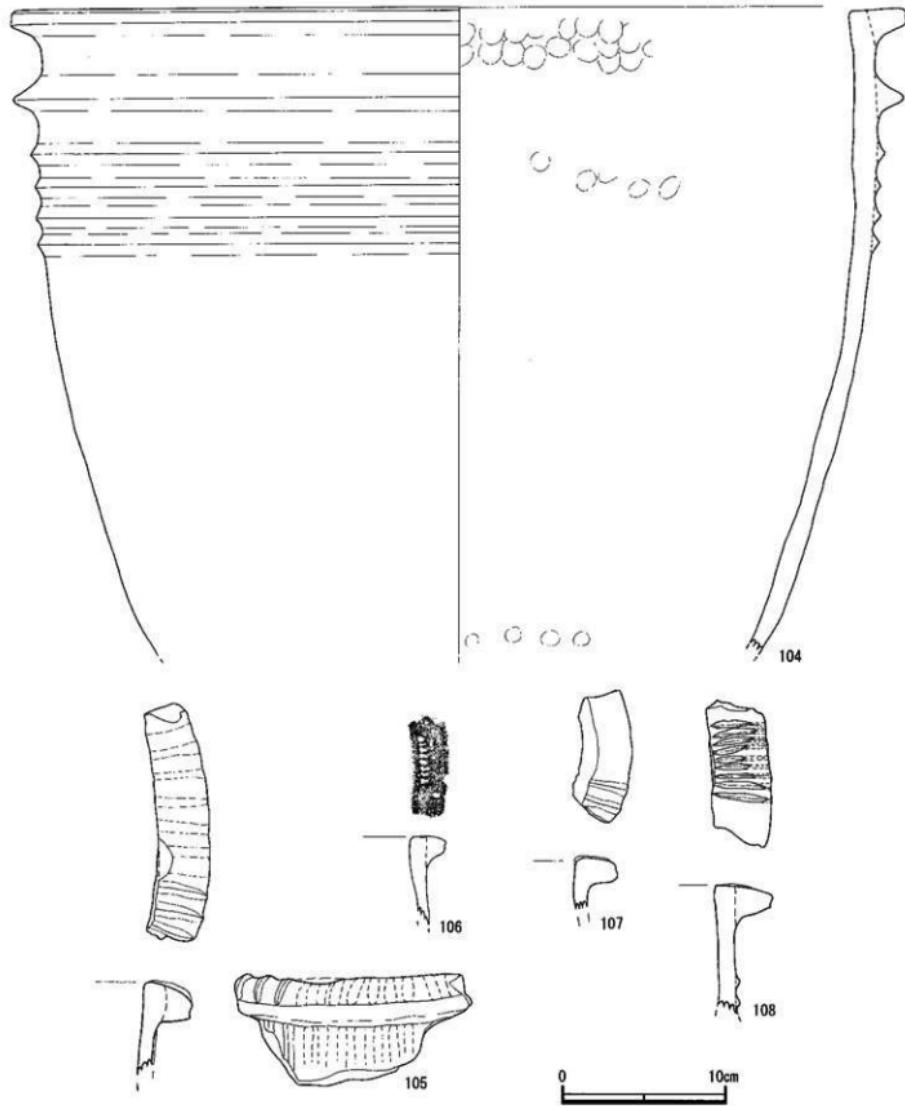
130～173は壺である。130は口縁部が緩やかに外反する。131は口縁部が鋸先状になっており、口唇部に連続して斜めの刻み目を施した後に、沈線を施す。132は頸部が強く屈曲する。133～135は口縁部が直立する。133は口唇部に刻み目を施し、口縁部内側に竹管文（？）を施す。134は口唇部に刻み目を施す。135は口唇部に浅い刻み目を施し、内側に竹管文を施す。136は口縁部に面を持ち、10本を1単位とした刻みが施されており、頸部に断面三角形の貼付突帯を施す。137は鋸先口縁で、口縁外端部に連続した刺突文を施し、口縁部上面には円形浮文を施す。138は口縁部の一部で、口縁部上面には円形浮文を施す。139は口縁部がL字に外反し、口縁部上面に断面三角形の貼付突帯が3本、口縁部内側に断面三角形の貼付突帯が2本、残存は悪いが頸部に貼付突帯が1条施されている。140・141は口縁外端部に連続した爪形文が施されている。口縁部上面には豆粒状の貼付浮文が施され、その両サイドに連続した爪形文が施されている。142は口縁外端部に2段の連続した爪形文を施し、口縁部上面には豆粒状の貼付浮文を施す。143は口縁外端部が欠損している。頸部には断面三角形の貼付突帯を5条施し、胸部上位には貼付突帯の上から沈線を施す。144は頸部がくの字に強く屈曲する。145は長頸壺の口縁部～頸部である。146・147は胸部中位のやや上に最大径を持ち、頸部下位に4本の沈線を施す。148～159は胸部の一部で、148は縦方向に3本の沈線が見られる。149は3本の沈線が見られる。150は1本の沈線が見られる。151は横に沈線を1本入れた後、縦に1.5～1.8cm間隔で4本の沈線を施す。152は横方向に1本の沈線を施し、それを中心として放射状の沈線を施す。153・154は3本単位の重弧文状の沈線が施されている。155は2本単位の重弧文状の沈線が施されている。156は残存している4個の竹管文が2段に配され、その下に横方向の沈線を1本描き、さらに縦方向に4本の沈線が残存している。157は竹管文が3個残存している。158は2段の竹管文が施されている。159は櫛状の工具による沈線が縦方向と横方向に見られ、それぞれが直角に交わる。160は風化が著しいが、櫛状の工具による沈線が4本見られ、その下に櫛描波状文を施す。161は頸部の下に4条の沈線を施し、その下に櫛描波状文を施す。162は頸部～胸部上位の破片で、頸部の下に断面三角形の貼付突帯を2条施した後、刻み目を施す。胸部上位に断面三角形の貼付突帯を3条施す。163は頸部下～胸部中位で、頸部下と胸部中位に断面三角形の貼付突帯が3本残存している。164は胸部中位のやや上に断面三角形の貼付突帯を2条施した後、刻み目を施す。165は肩部と思われる部分で、1条の沈線を挟んで竹管文が2段配されている。166は長頸壺の頸部～胸部で、頸部下～胸部上位にかけて削り出しによる断面三角形の突帯が4本施されている。頸部の内部には明瞭な絞り痕を残す。最大径を胸部中位に持つ。167～173は底部で、167～171は平底を呈する。172・173は若干の上げ底を呈する。

174は壺で、底部はやや上げ底を呈する。175は蓋である。176・177は高杯で、176は脚上部に断面三角形の貼付突帯を施し、脚部はハの字に開くようである。177は脚部の一部で、脚部には3本の沈線を巡らせ、脚体部には矢羽透かしの痕跡が2ヶ所見られる。178は甕？で胴部下位に把手状のものが見られる。把手状のものは2ヶ所についていたものと思われるが、全体の残存が1/2程度のため、確認できるのは1つのみである。179は須恵器の平瓶である。胴部と頸部の一部が残存する。全体的にカキ目調整が行われている。ボタン状のつまみ（？）のようなものが同時に出土したが、おそらく洗浄の段階で紛失してしまい、どの部分につくもののかは確認できなかった。

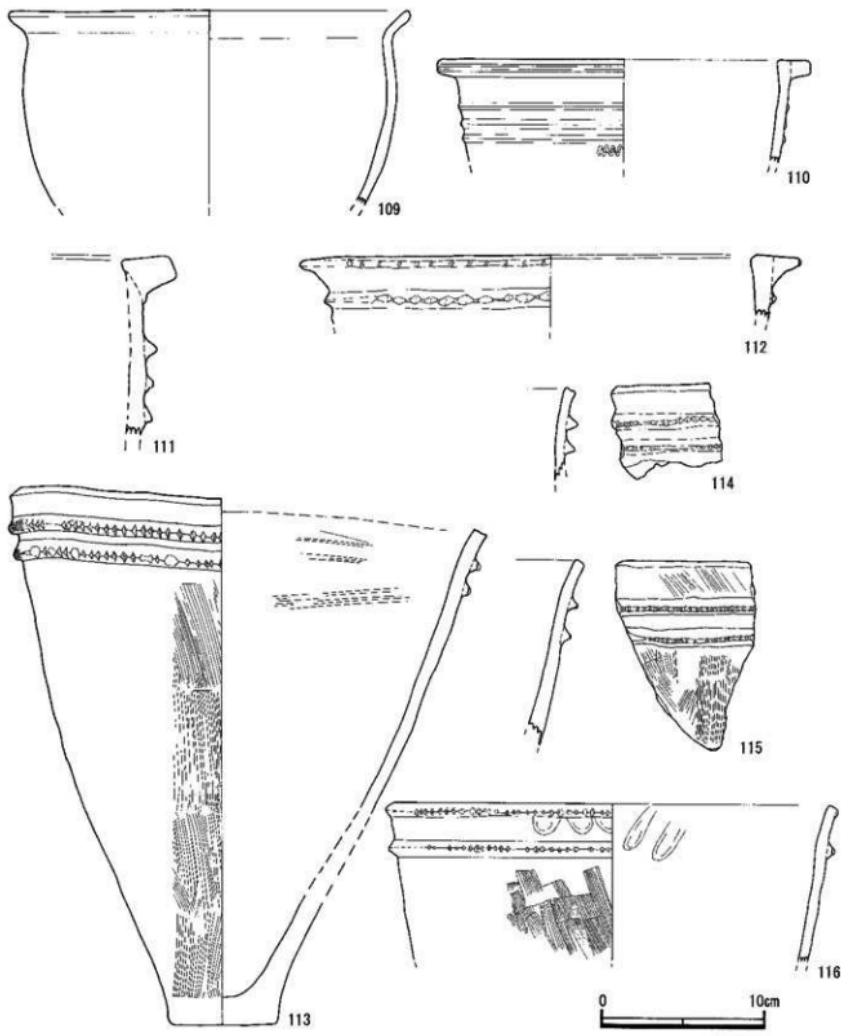
180は凹基式の打製石鏃である。181は凹基式の磨製石簇である。182～184は磨製石斧である。185・186は凹石である。187・188は砥石である。189は敲石である。190・192は磨製石斧の基部である。193は環状石斧で、1/2程度が残存している。194は天祐通宝（初鑄1017年）である。



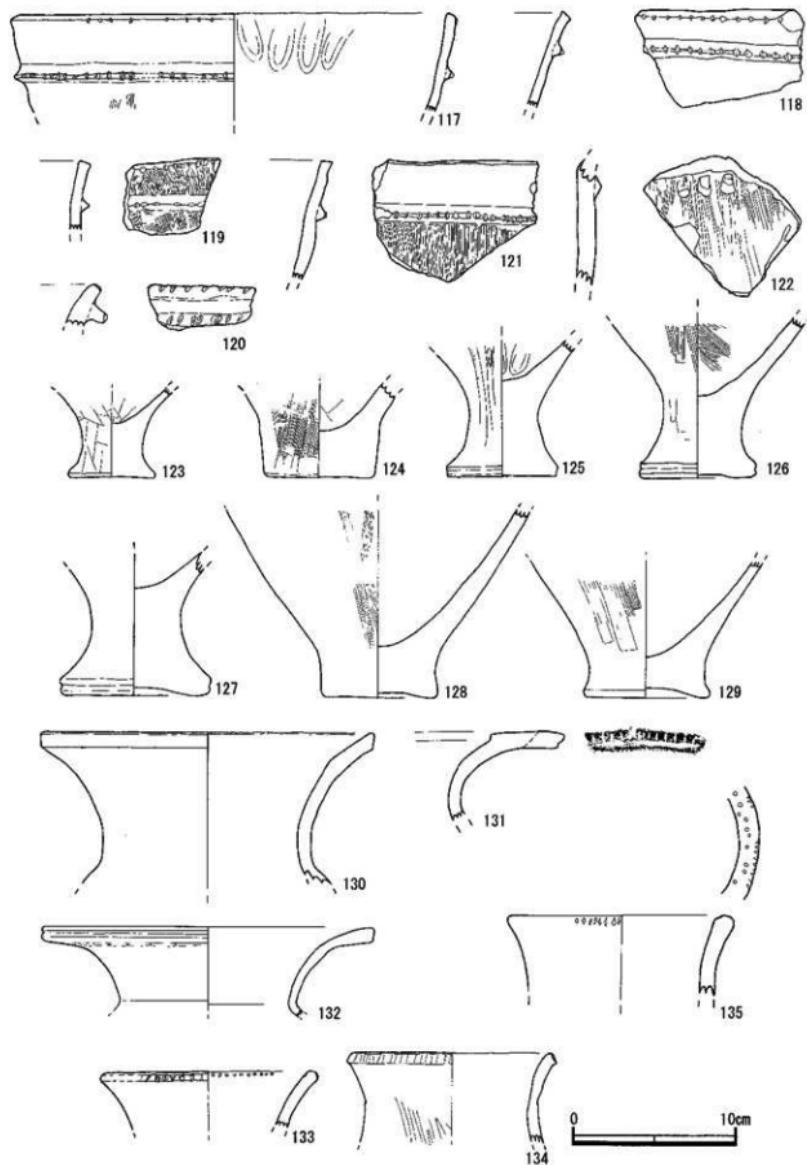
第14図 B区出土遺物(1)



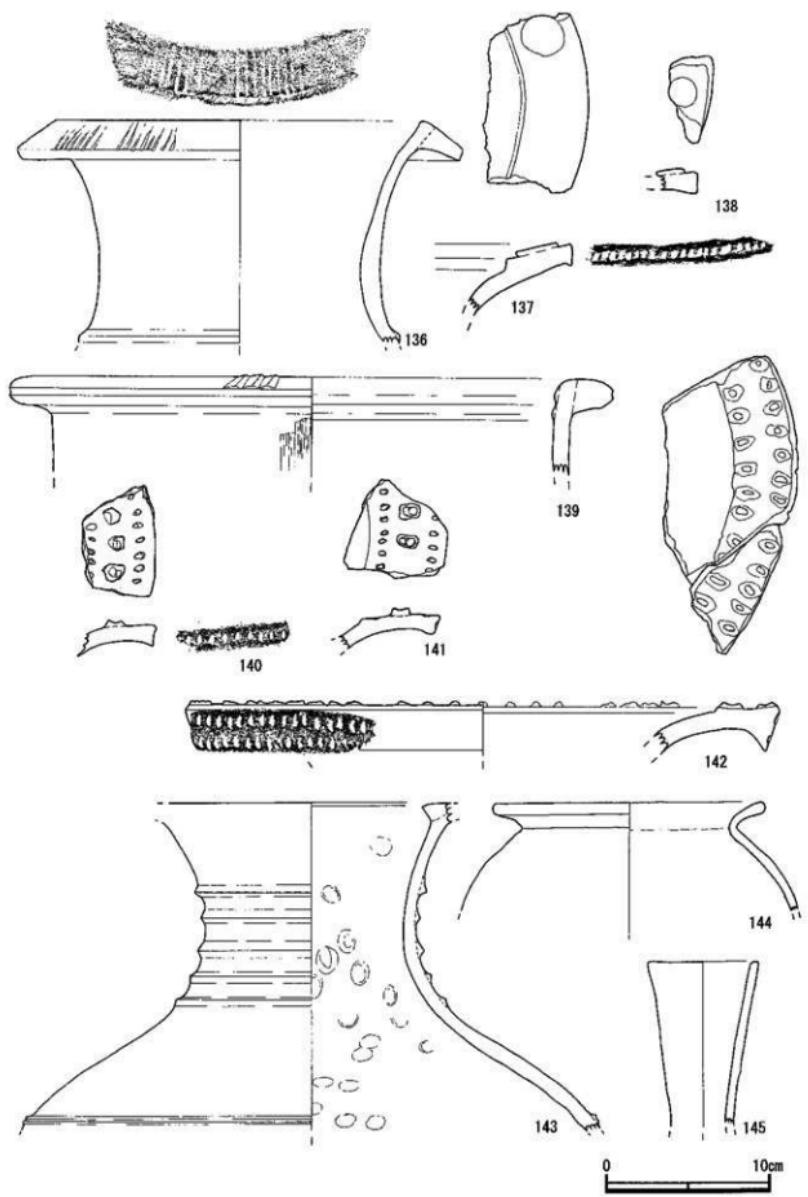
第15図 B区出土遺物(2)



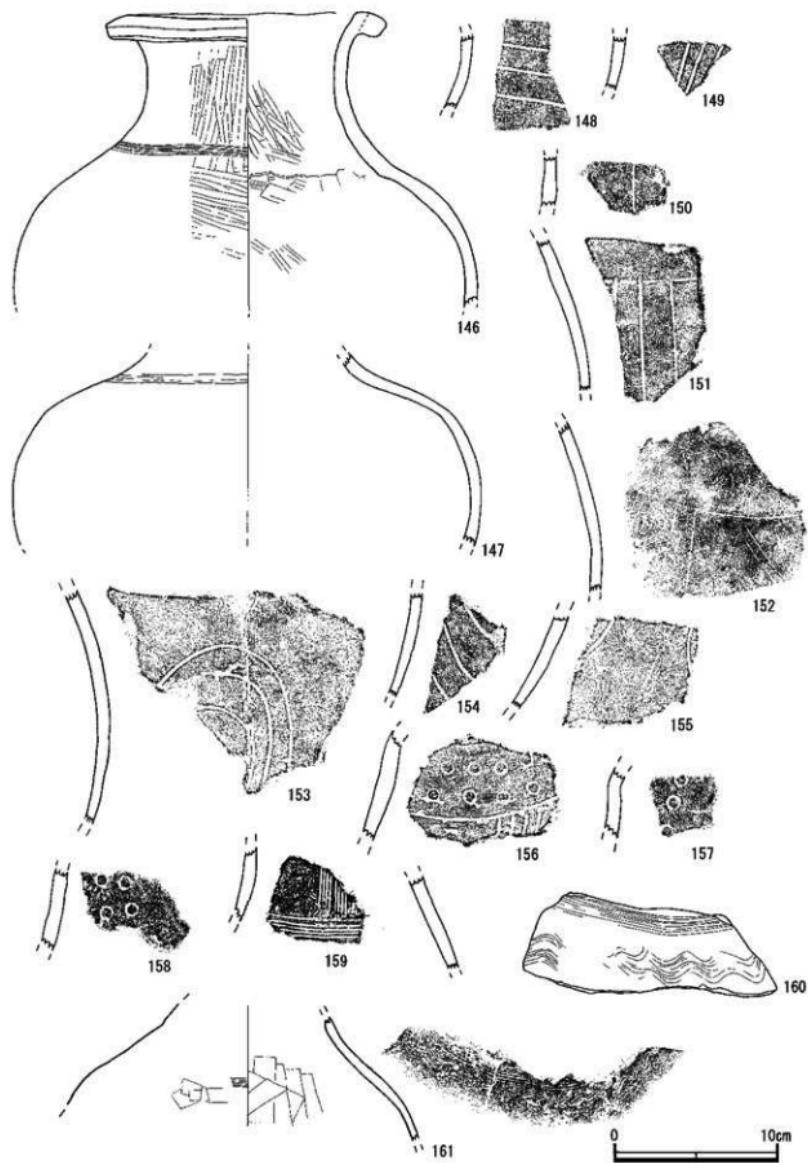
第16図 B区出土遺物(3)



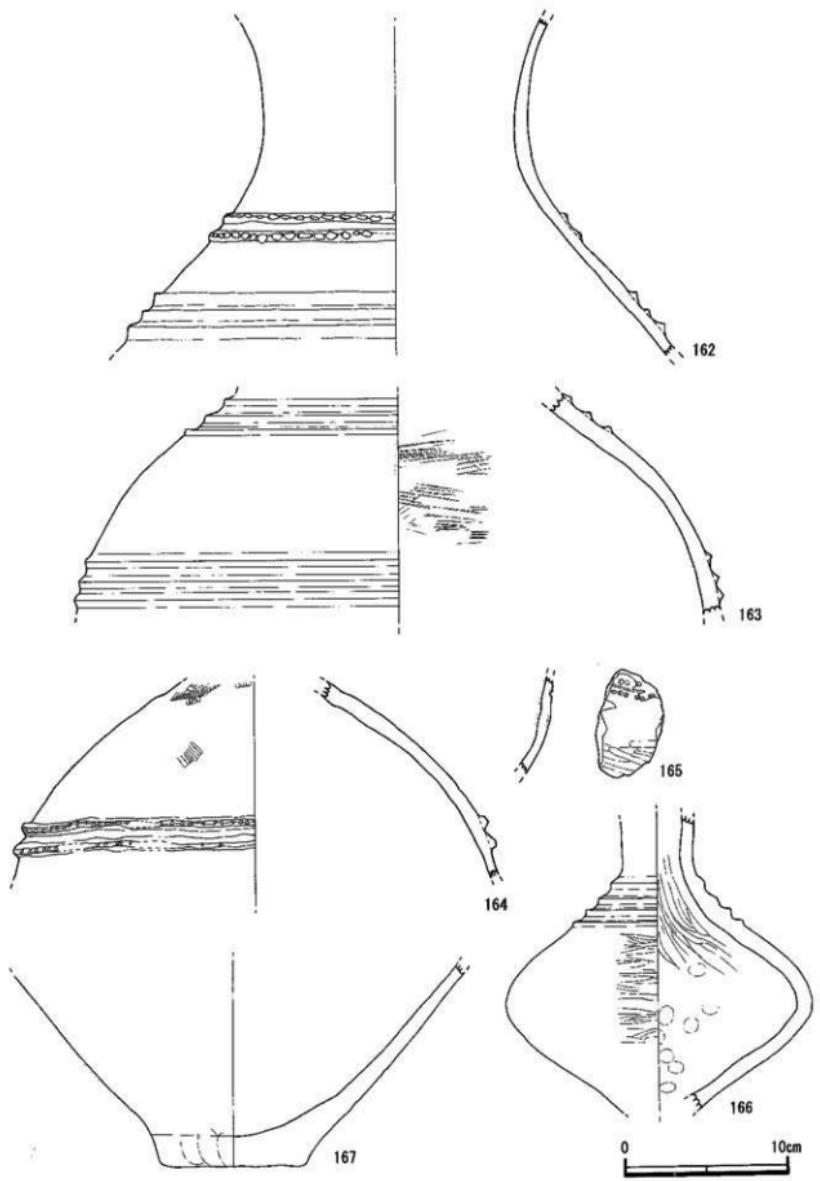
第17図 B区出土遺物(4)



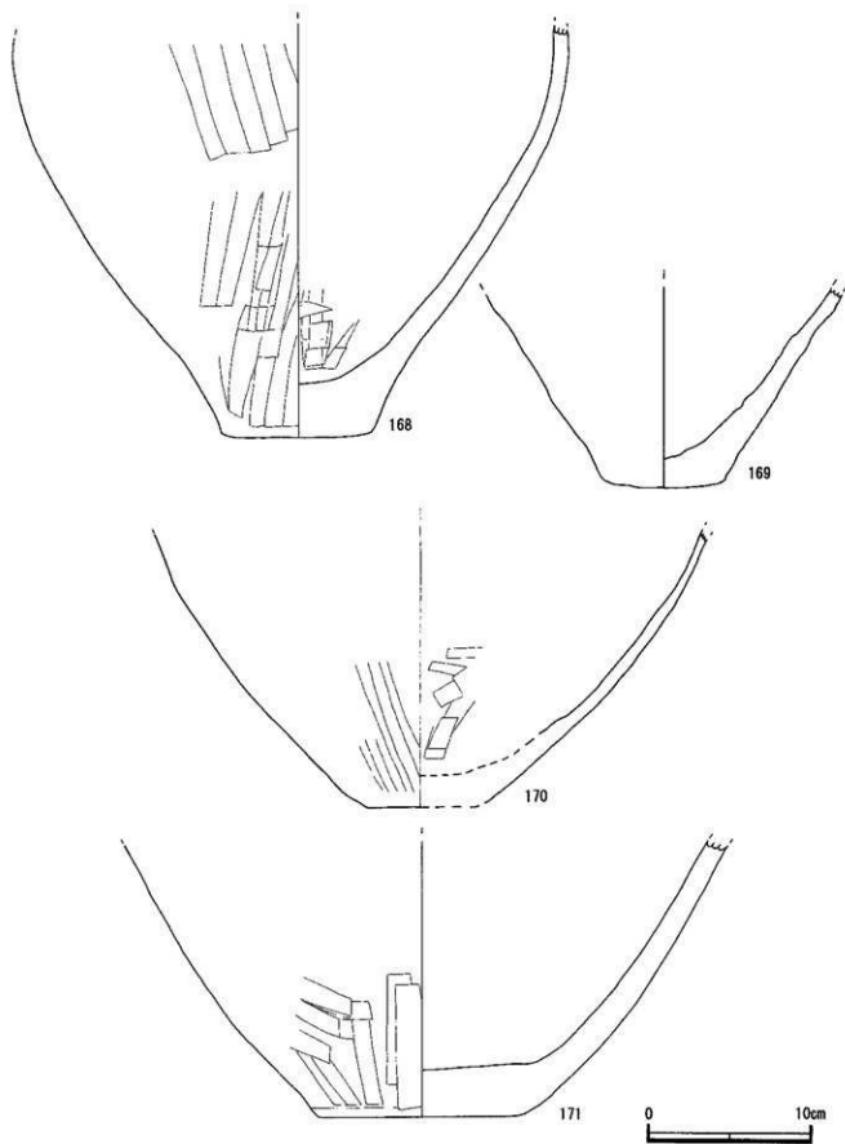
第18図 B区出土遺物(5)



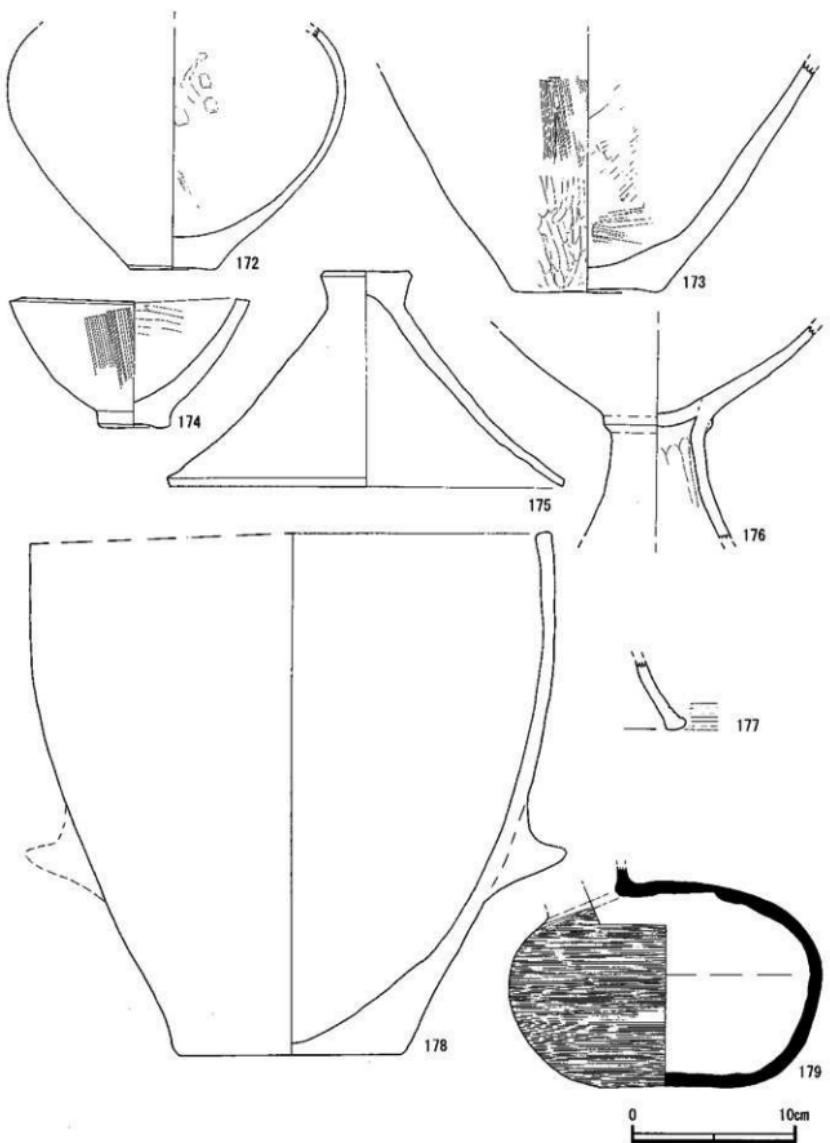
第19図 B区出土遺物(6)



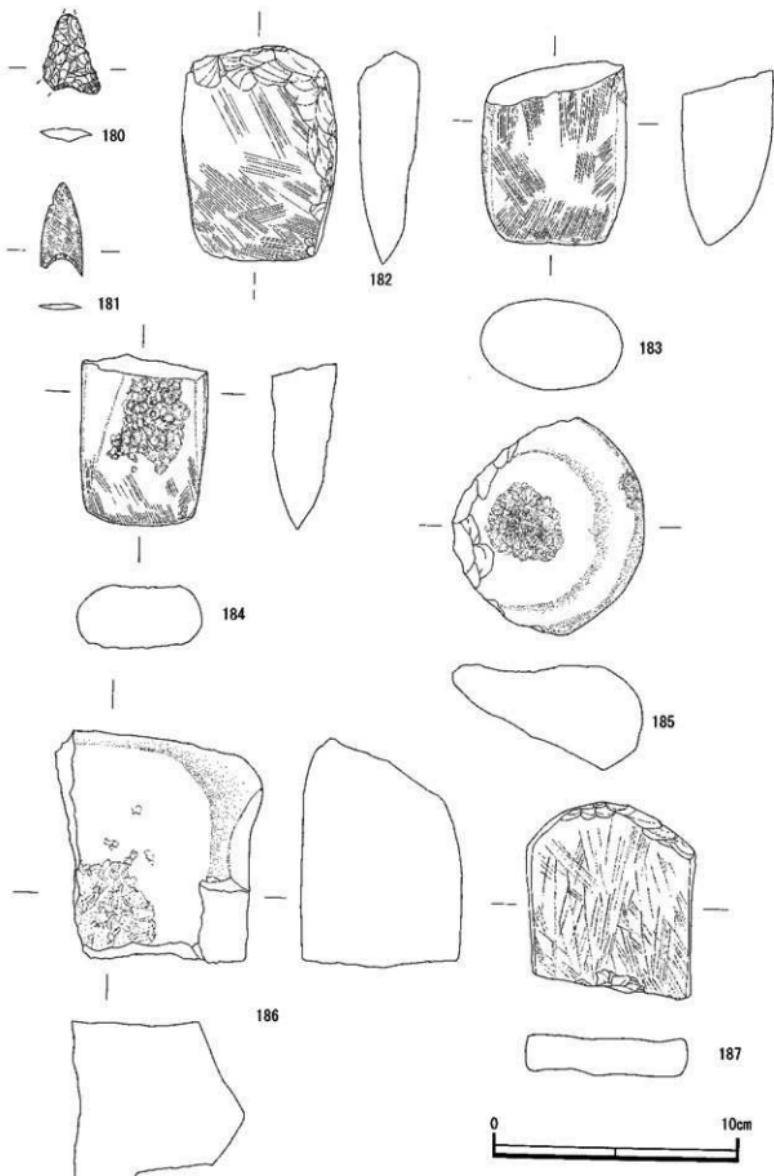
第20図 B区出土遺物(7)



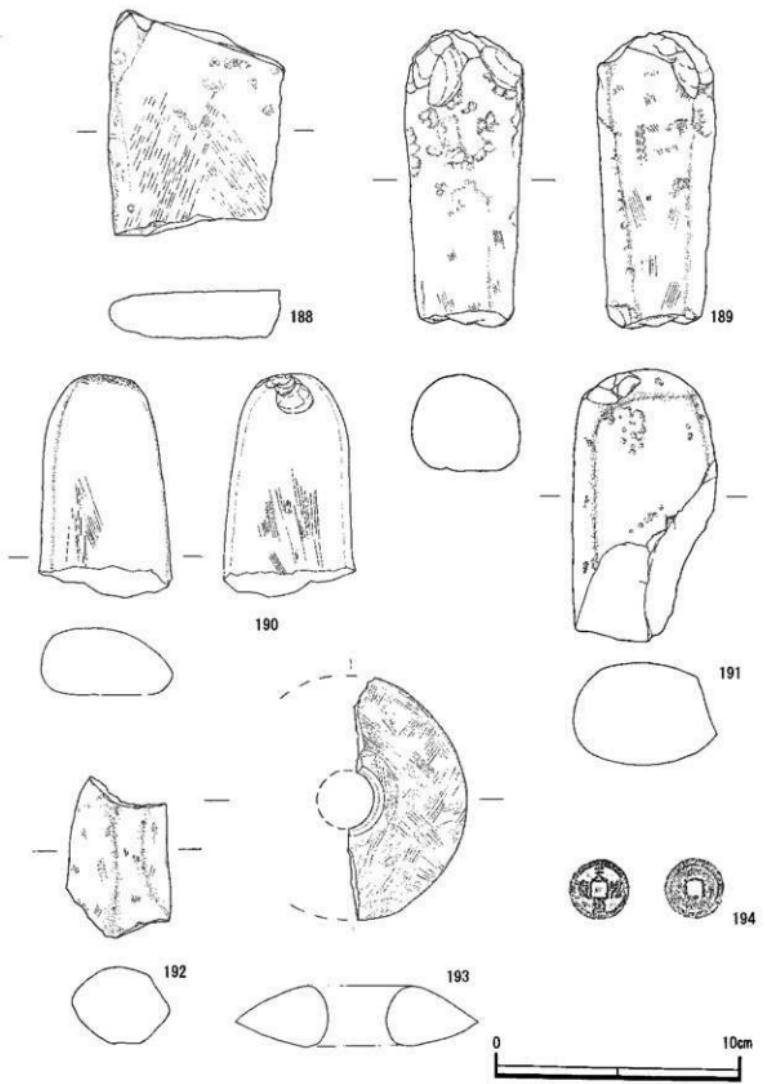
第21図 B区出土遺物(8)



第22図 B区出土遺物(9)



第23図 B区出土遺物(10)



第24図 B区出土遺物(11)

第4節 C区の調査

C区においては、マンホールや下水道管等により、調査区の1/3弱を擾乱されていた。

上層確認用のトレンチを設けたが（土層については第2回参照）、A・B区で確認された溝状遺構の続きと、それ以外の遺構は確認されなかった。そのため、1号溝状遺構は北に大きく蛇行している可能性がある。遺物もA・B区に比べると、出土量は非常に少なかった。

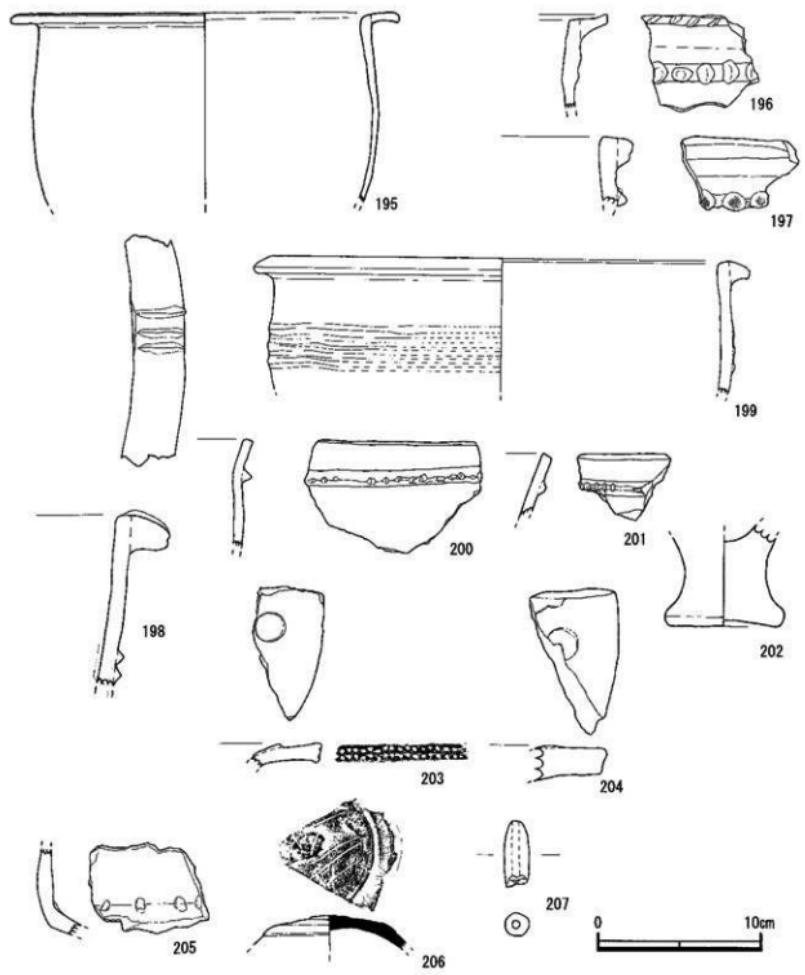
土層確認用のトレンチから判断すると、現地表面から1m程度下で、砂と粘土の互層が見られ、それらの層に混じって植物遺体を大量に含む層が確認されていることから、自然流路か溜池のような施設があったものと思われる。掲載した遺物のほとんどが、土層確認用のトレンチから出土したものである。

出土遺物

195～202は壺である。195・196は口縁部がL字に屈曲する。196・197は口縁部に刻み日を施す。口縁部下に貼付突帯を施した後、その上に連続した指頭痕を残す。197は口縁部下に断面三角形貼付突帯を施した後、刻み日を施す。刻み目内には平織状の組織痕が確認できる。198は口縁部上面に3条の突帯を持ち、胸部上半に断面三角形の貼付突帯が2条残っている。199は胸部上半に断面三角形の貼付突帯を3条施す。200・201は口縁部が直立するもので、口縁部下に断面三角形の貼付突帯を施した後、刻み日を施す。202はやや上げ底を呈する底部である。

203～205は壺である。203・204は口縁部上面に円形浮文をもち、203では口縁外端部に面を持ち、連続した竹管文を2列に施す。205は頸部付近で、頸部に梢円形の貼付浮文を施す。

206は須恵器の坏蓋で、ボタンつまみを持つ。焼成も悪く、作りも雑である。207は試掘調査で出土した土鍤である。



第25図 C区出土遺物

第Ⅲ章 宮崎小学校遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	A区溝状遺構	炭化材（杭？）	酸アセト-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. (Beta-)
No. 1	2100±60	-26.5	2080±60	交点: cal BC80 1 σ : cal BC180~30 2 σ : cal BC350~310, BC210~AD50	157095

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を校正することにより算出した年代。校正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比

較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

曆年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と曆年代較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68%確率) および 2σ (95%確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

第2節 プラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山, 2000）。

2. 試料

試料は、A地点とB区の2地点から採取された計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1 gに対し直径約40 μm のガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、100倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1 g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g ）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、スキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) A区

弥生時代中期遺物包含層（試料1～4）から植物遺体混層（試料10）までの層準について分析を行った。その結果、最上位の試料1からイネが検出された。密度は2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、上層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) B区

弥生時代中期遺物包含層（試料1～4）から植物遺体混層（試料10）までの層準について分析を行った。その結果、弥生時代中期遺物包含層（試料1～4）とその下層（試料5）、粘質上層（試料7）、および植物遺体混層（試料10）からイネが検出された。このうち、弥生時代中期遺物包含層下部の黒褐色土層（試料4）では、密度が9,700個/gとかなり高い値である。また、弥生時代中期遺物包含層の暗褐色土層（試料2）と褐色土層（試料3）でも5,300～6,100個/gと高い値であり、その上層（試料1）でも3,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では、稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が700～800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

6.まとめ

プラント・オパール分析の結果、B区の弥生時代中期遺物包含層からはイネが多く検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、A区の弥生時代中期遺物包含層やB区の粘質土層などでも、稻作が行われていた可能性が認められた。

文献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p. 189-213。
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p. 15-29。
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17、p. 73-85。

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料	A区							
			1	2	3	4	5	6	7	8
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	23								
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	15	15	8						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	15	8							
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	53	90	15	30	23	30	53	30	37
										45

推定生産量(単位: kg/m²・cm)

分類群	学名	地点・試料	B区							
			1	2	3	4	5	6	7	8
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	30	53	61	97	8				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	15	8	15						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	15	15	23	45	23				
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	23	8	23	52	38	30	45	60	22
										68

※試料の返比重を1.0と仮定して算出。

検出密度(単位: ×100個/g)

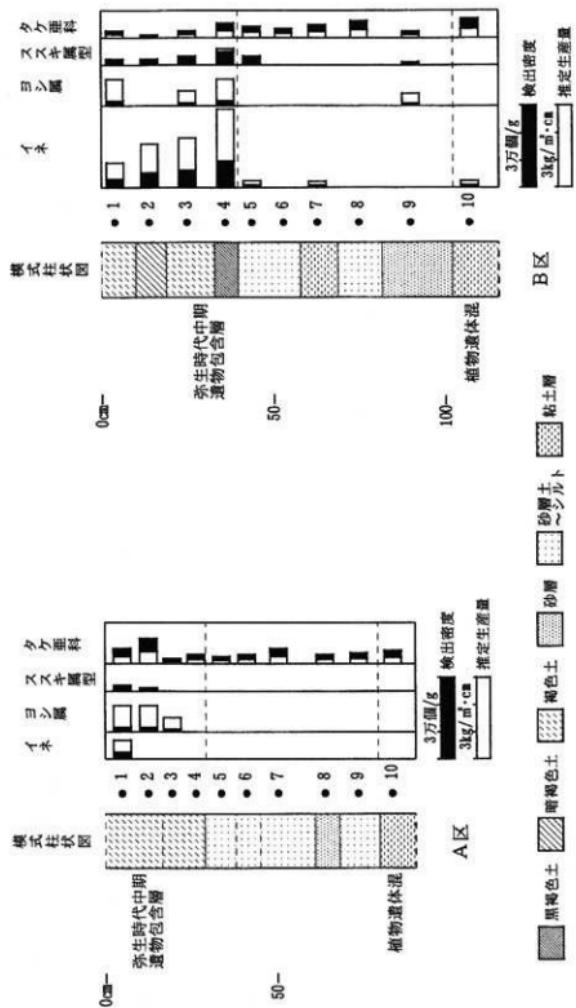
分類群	学名	地点・試料	A区							
			1	2	3	4	5	6	7	8
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.88	1.55	1.78	2.87	0.22				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.95	0.48	0.95						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.19	0.19	0.28	0.56	0.28				
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	0.11	0.04	0.11	0.25	0.18	0.15	0.22	0.29	0.11
										0.33

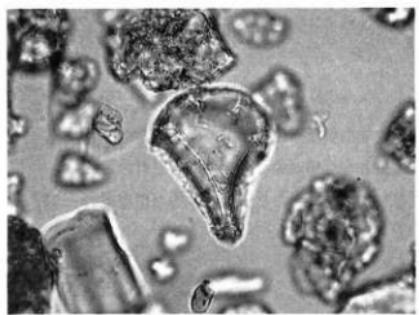
推定生産量(単位: kg/m²・cm)

分類群	学名	地点・試料	B区							
			1	2	3	4	5	6	7	8
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.88	1.55	1.78	2.87	0.22				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.95	0.48	0.95						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.19	0.19	0.28	0.56	0.28				
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	0.11	0.04	0.11	0.25	0.18	0.15	0.22	0.29	0.11
										0.33

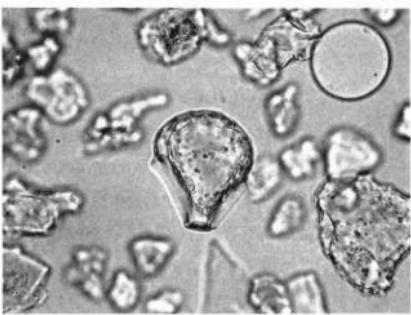
※試料の返比重を1.0と仮定して算出。

第1表 プラント・オバール分析結果

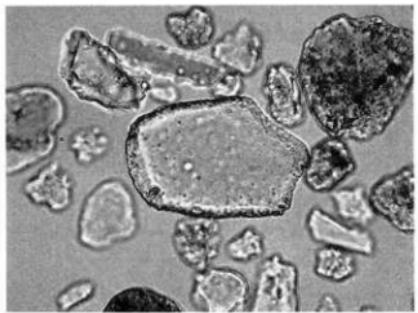




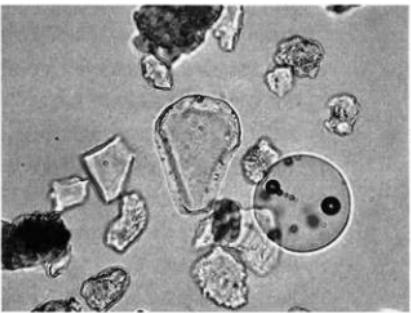
イネ
区3



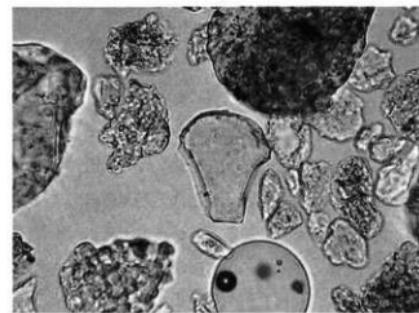
イネ
区4



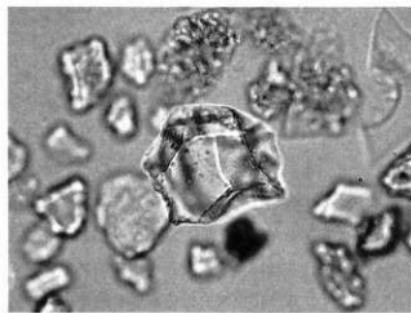
ヨシ属
区3



ススキ属
区3



メダケ節型
区3



ブナ科(シイ属)
区3

— 50 μ m —

第27図 植物珪酸体(プラント・オパール)顕微鏡写真

第3節 花粉分析

1.はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、B区から採取された5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉15、シダ植物孢子2形態の計45である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亞属、スギ、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属—マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、アカメガシワ、ジャケツイバラ、

サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、シナノキ属、グミ属、トネリコ属、ニワトコ属—ガマズミ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、マメ科

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、タデ属サナエタデ節、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、シソ科、タンポポ亞科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

花粉群集の組成変遷から、下位より I 帯、II 帯、III 帯の花粉分帯を設定した。以下に、花粉分帯に沿って花粉群集の特徴を記す。

1) I 帯 (植物遺体混層、試料10)

樹木花粉の占める割合が非常に高く、特にコナラ属アカガシ亞属、シイ属—マテバシイ属の出現率が高い。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

2) II 帯 (粘質土層、試料7)

樹木花粉と草本花粉はほぼ同程度に出現する。樹木花粉では、シイ属—マテバシイ属の出現率が高く、コナラ属アカガシ亞属も多い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が優占し、クワ科—イラクサ科、ヨモギ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科が伴われる。

3) III 帯 (弥生時代中期遺物包含層、試料2、3、4)

草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率が高く、タデ属サナエタデ節、チドメグサ亞科、タンポポ亞科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亞属、シイ属—マテバシイ属が比較的多く、コナラ属コナラ亞属、マツ属複維管束亞属なども低率に伴われる。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

最下位の植物遺体混層の堆積当時は、コナラ属アカガシ亞属、シイ属—マテバシイ属を構成要素とする照葉樹林に覆われる状態であったと考えられ、カヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属などの草本も林縁などに生育していたと推定される。

粘質上層の堆積当時は、イネ科を主にクワ科—イラクサ科、ヨモギ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科などが生育する日当たりの良い人里の環境であったと推定される。イネ属型を含むイネ科が優占することから、調査区周辺では稲作が行われていた可能性が考えられる。遺跡周

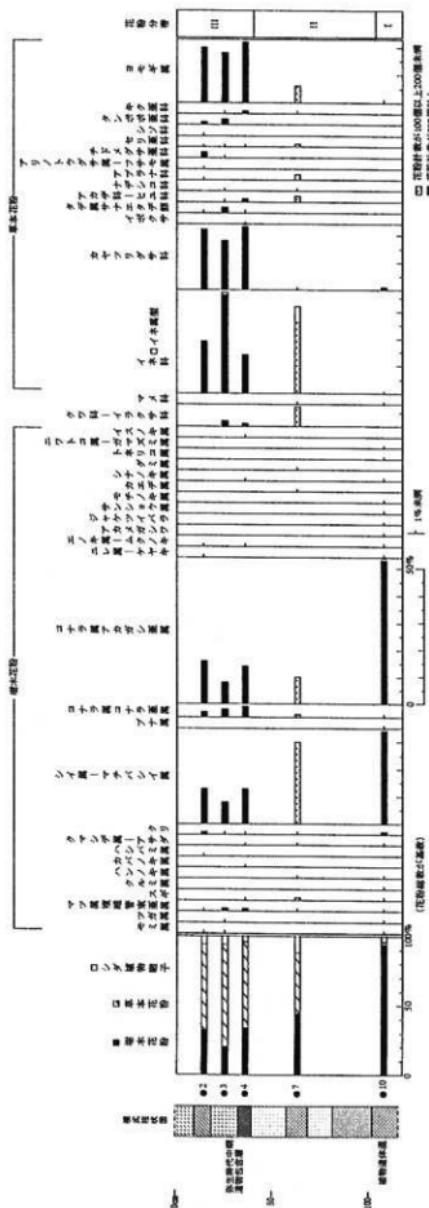
辺にはシイ属一マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布していたと推定される。

弥生時代中期遺物包含層の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが多く生育する口当たりの良い人里の環境であったと考えられ、調査区周辺では水田稲作が行われていたと推定される。周辺地域には、シイ属一マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布していたと考えられ、コナラ属コナラ亜属やマツ属複維管束亜属も生育していたと推定される。

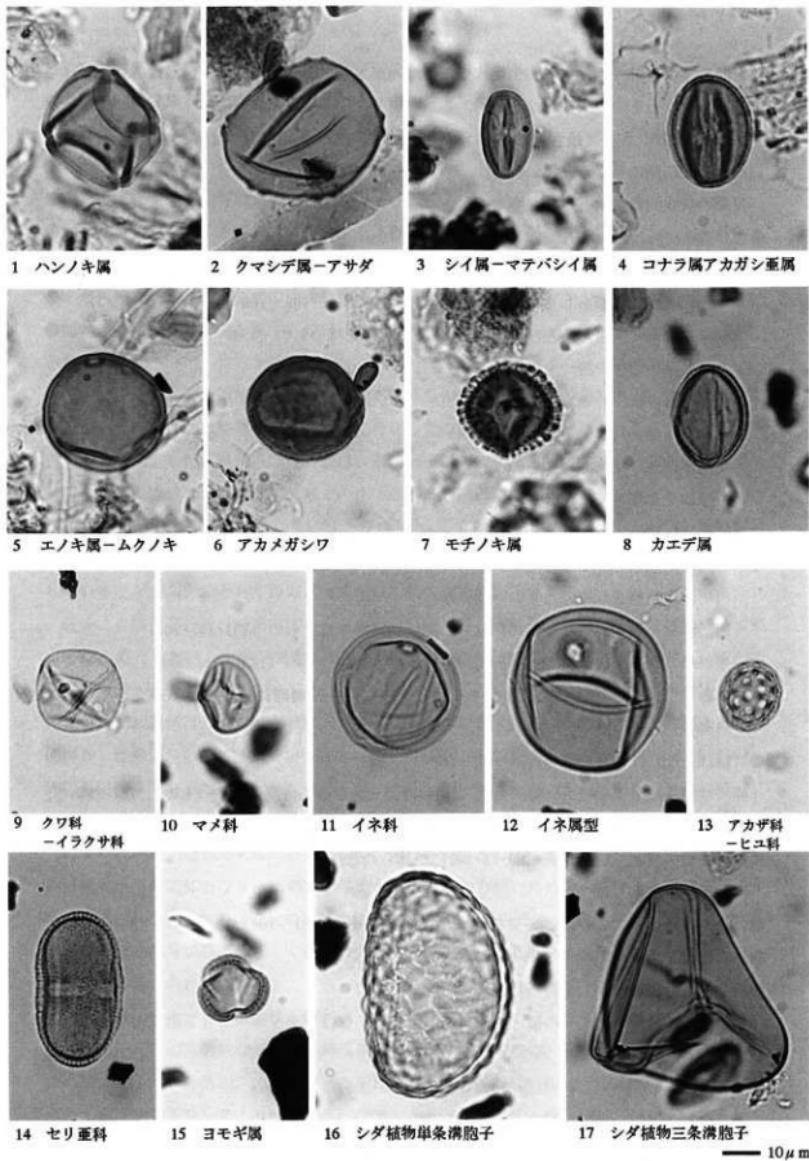
文献

- 中村純（1973）花粉分析、古今書院、p. 82-110.
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p. 248-262.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
- 中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として、第四紀研究、13、p. 187-193.
- 中村純（1977）稻作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p. 21-30.

第28図 花粉ダイアグラム



宮崎小学校遺跡の花粉・胞子



第29図 花粉写真

第IV章　まとめ

宮崎小学校遺跡では、主に弥生時代中期の遺物が大量に出土した。石川悦雄氏の編年に従って分類を行うと下記のようになる。

まず、当遺跡において最も古いと思われる遺物は、胸部が張り頸部下に沈線を持つもの（146・147）で、IIa期に当たると思われる。

III期の代表的な遺物として、壺では、

●口縁部がU字に屈曲する比較的古いもの（1～15・93～100・195・196）

●口縁部の断面が台形もしくは長方形を呈し、内面が窪むもので、

口縁部上面に沈線もしくは突帯を持つもの（29・30・95・105～108・198）

口縁部上面に突帯を持ち、口縁内部に2条の突帯を持つもの（139）

3条の貼付突帯を持つもの（8・21～27・111・199）

沈線が施されているもの（10）

波状文が施されているもの（96・110）

沈線と櫛描波状文を持つもの（11）

口縁部下に穿孔が見られるもの（28）

また、壺では

●口縁部が鈎先状を呈すると思われるもので

円形浮文が施されているもの（138・204）

円形浮文を施し、口縁端部に刻目もしくは刺突文を施すもの（131・137・203）

頸部に5条の突帯を持ち、胸部にM字形の突帯を持つもの（143）

口縁部上面に豆粒状の貼付浮文や爪形文を施し、口縁端部に連続した爪形文を施すもの（140～142）

●口縁部上面に沈線を施すもの（66・67・136）

高坏は個体数が少ないが、脚部上位に1条の断面二角形の貼付突帯を持つもの（176）がある。

さらに、III～IV期にかかる遺物として、頸部に豆粒状の貼付突帯を持つ壺（205）や、胸部に沈線や櫛描波状文を持つ壺（69・71・101）が見られる。

IV期の遺物としては、

●口縁部が屈曲し、その下に突帯を持つ大型の壺（16・17・101～104）

●口縁部がくの字に屈曲する壺（32・33・109）

●瀬戸内系の矢羽透かしを持った高坏の脚据部（177）

また、いわゆる下城式系の壺・壺も出土している。壺はヴァリエーションに富んでおり、

●口縁部が直立するもので

口縁部下に1条の刻目突帯を持つもの（34～38・201）

口縁部下に2条の刻目突帯を持つもの（39）

口縁部と口縁部下の突帯に刻目を施すもの（41・42・117）

●口縁部がやや外反するもので

- 口縁部下に1条の刻口突帯を持つもの (121・200)
- 口縁部下に2条の刻口突帯を持つもの (40・113~115)
- 口縁部と口縁部下の突帯に刻みを施すもの (118・119)
 - 口縁部と口縁部下に突帯を持ち、それぞれに刻口を施すもの (116)
 - 口縁部に刻目を施し、口縁部下の突帯が高く、刻みが深い、新しいもの (120)
- 壺としては、
 - 胸部に竹管文を施すもの (157・158)
 - 胸部に竹管文を施し、半裁竹管文による沈線を施すもの (156)
 - 半裁竹管文による沈線を施すもの (148~151)
 - 半裁竹管文による重弧文状の沈線を持つもの (153~155)
 - 簡状工具によって沈線を施すもの (152・159)

が見られる。

遺物は圧倒的に石川編年Ⅲ期に位置づけられるものが多く、遺物の量で単純に地域の隆盛は計れないものの、この時期の集落が周辺に存在したことは間違いないだろう。また、今回の調査で大量に出土した下城式系の甕・壺は、宮崎市内においては宮崎大学茶園遺跡・椎屋形第1遺跡・保木下遺跡など、大淀川流域での出土例が多いことが知られている。

また、今回出土した遺物のうち178については、周辺地域に出土例がなく、時代的な位置づけに悩んでいるが、この遺物は環状右斧 (193) や、未掲載ではあるが23と同様の遺物と共にしていることから、おそらくⅢ期に位置づけられる遺物であろう。

最後に自然科学分析の結果を踏まえながら、宮崎小学校遺跡周辺の歴史的な変遷について述べてまとめたい。今回の調査場所と大淀川の距離は明治37年度の地図で約100m、現在でも約500mほどしか離れていない。C区の土層確認用トレンチで確認された、植物遺体を大量に含む流路状遺構は、もともと流れが大きく蛇行していた大淀川の旧河道の可能性がある。今回調査した部分から南は、おそらく弥生時代中期以前には大淀川か、もしくはその分流であり、周辺も氾濫原であった可能性が高い。ただし流路状遺構から出土した植物遺体の分析結果から、大淀川沿いはコナラやシイを中心とした常緑広葉樹が生育する環境であったと思われる。

弥生時代中期になって大淀川の流れがやや南へ移動すると、現在の宮崎小学校遺跡を境に北側は微高地の縁辺部となり、南側は低湿地となったものと思われる。C区で1号溝状遺構の統計が検出されなかったのは溝状遺構が北にふっているためだと思われるが、その原因としては、C区にあたる部分が低湿地もしくはそれに類するものであったため、水田として利用されていた可能性が考えられる。

溝状遺構から出土した遺物は圧倒的に石川編年Ⅲ期に位置づけられるものが多く、今回の調査では住居址等の直接的な生活の痕跡は確認できなかったものの、おそらく宮崎小学校から北側の微高地 (県庁周辺) には弥生時代中期の集落が営まれていたことが窺える。B区の調査区の土層確認用トレンチより南東では、プラント・オパール分析の結果から水田が存在していた可能性が示唆されており、今回確認された溝を二期に水田域と住居域が分かれていた可能性がある。また花粉分析の結果から、周辺にはシイやコナラが生育する照葉樹林が分布していたと思われる。

今回の調査では弥生時代中期の遺物がほとんどであり、それ以降の遺物はほとんど出土していないが、流れ込みと考えられるとはいえ須恵器が2点(179・206)出土しており、周辺に広島古墳群があったといわれることから、集落の拠点を宮崎小学校の近くから他の場所に移動した可能性はあるが、古墳時代においても広島古墳群を築いた人々の集落が近くに存在した可能性が窺える。

今回は幸運にも市街化地域において調査する機会に恵まれた。宮崎小学校遺跡の位置づけや周辺の歴史的環境等を明らかにするには、更に周辺での調査例を待つ必要がある。なかなか調査する機会に恵まれない地域ではあるが、今後は周辺地域の試掘調査等を徹底し、更なる情報の収集を計りたい。

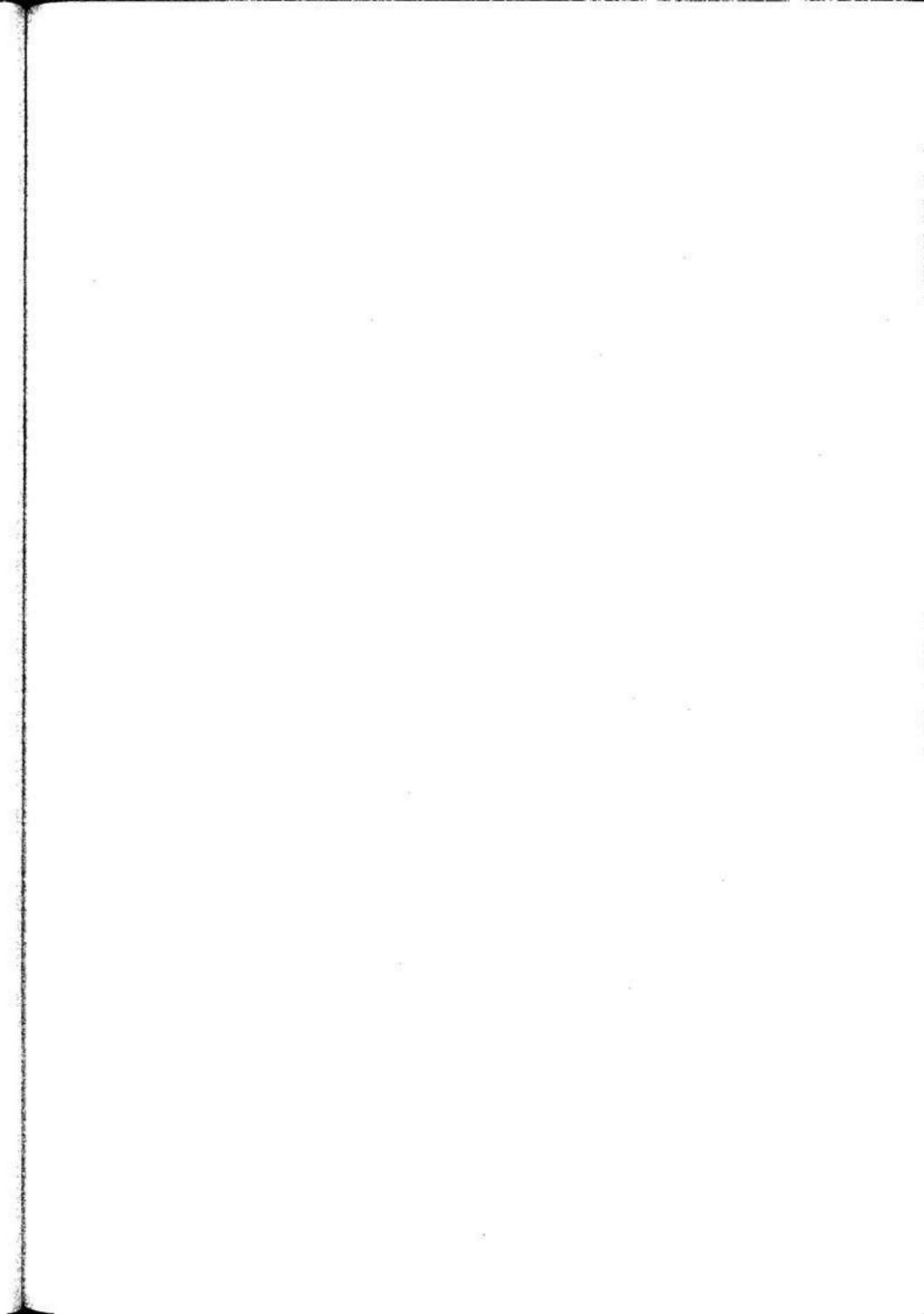
最後になりましたが、発掘調査に同心を持っていただき、最初から最後までご協力くださった大倉校長先生をはじめとする宮崎小学校関係者の方々や周辺地域の方々、寒い時期から暖かくなる季節の変わり目の中、最後まで調査に従事していただいた作業員の皆様に、心よりお礼申し上げます。

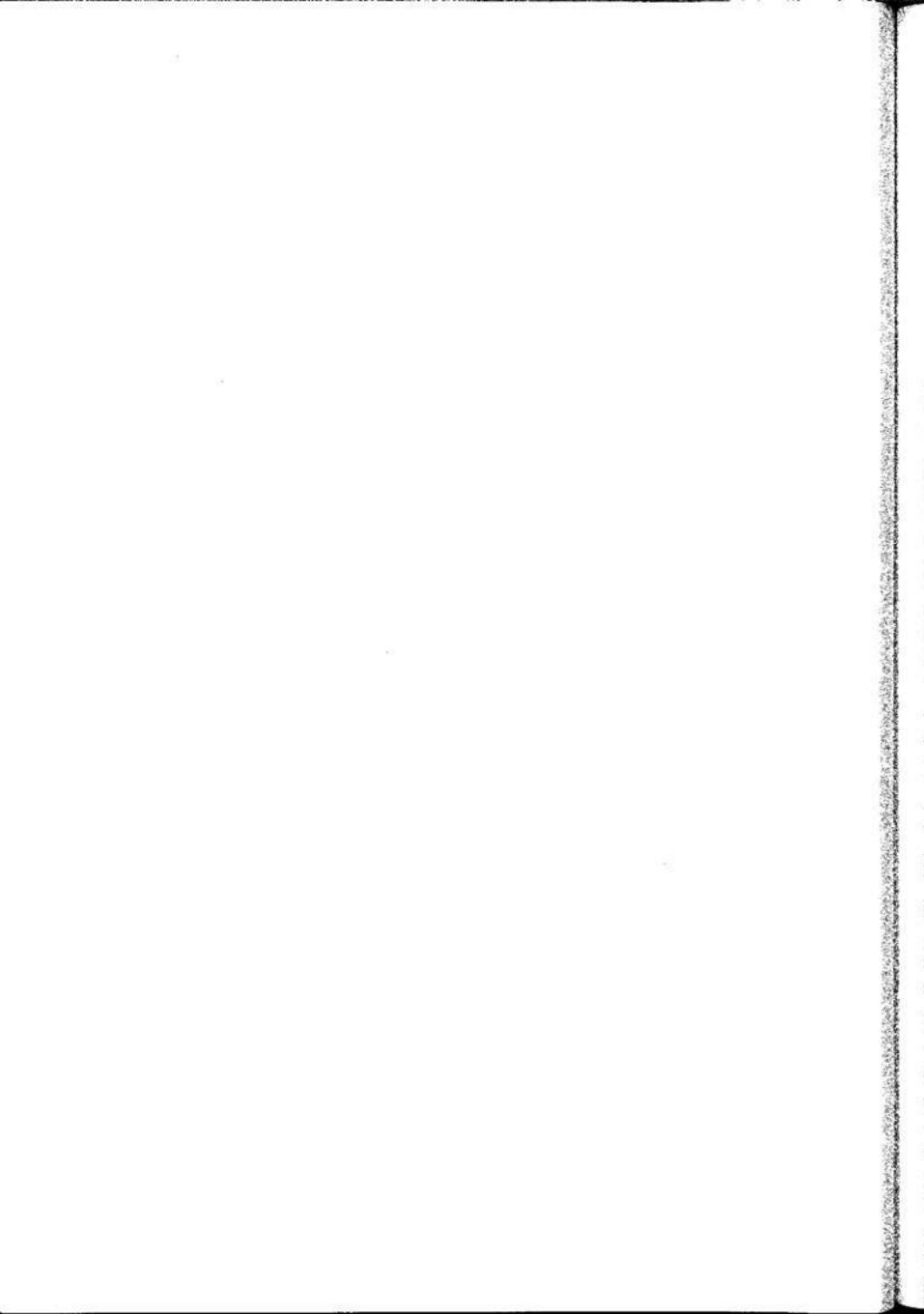
【参考文献】

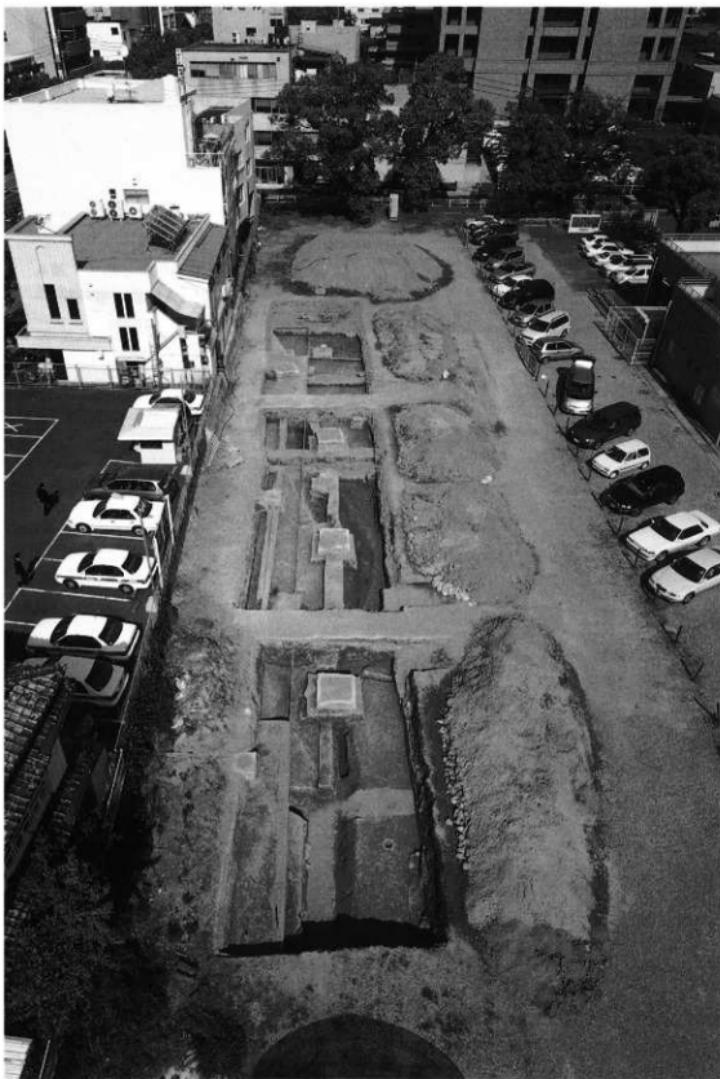
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998 『市位遺跡』
新富町教育委員会 1983 『經遺跡 藤掛遺跡』
高鍋町教育委員会 1982 『持田中尾遺跡』
大分県教育委員会 1995 『大在古墳・浜遺跡第2地点』
宮崎市教育委員会 2000 『北ヶ迫遺跡』
宮崎市教育委員会 1997 『車坂・山下遺跡群 車坂第1・2・3遺跡 山下第1・2・3遺跡』
宮崎市教育委員会 1996 『推屋形第1遺跡・推屋形第2遺跡・上の原遺跡』
桑畑光博 2000 「中溝式系上器の検討—宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年むけてー」 『古文化談叢』第45集
石川悦雄 1985 「日向考古資料 I」 『研究紀要 昭和59年度』第10集
宮崎県総合博物館
石川悦雄 1984 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描—(Mk. II)」
『宮崎考古』9号 宮崎考古学会

第10表 出土石器計測表

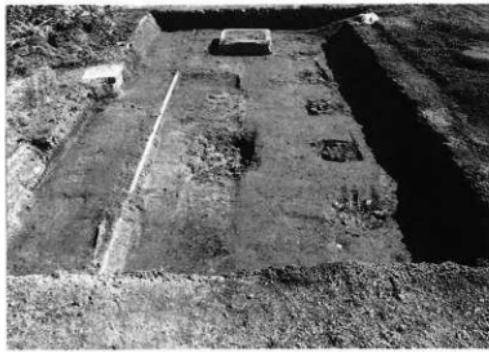
番号	出土遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
87	A区	磨製石鎌	4.80	2.55	0.20	2.85	黄石	
88	"	磨製石鎌	2.60	1.20	0.15	0.72	頁岩	
89	"	研磨車	3.80	3.70	0.70	18.46	頁岩	未製品
90	"	打製石斧	10.90	5.50	5.45	535.00	砂岩	
91	"	敲石	17.20	5.50	3.20	490.00	砂岩	
92	"	磨製石斧	4.20	6.20	4.10	195.00	頁岩	敲石に転用か?
180	B区	打製石鎌	3.00	2.20	0.55	2.89	黑曜石	
181	"	磨製石鎌	3.80	1.80	0.20	1.48	頁岩	
182	"	磨製石斧	8.90	6.40	2.50	210.00	頁岩	
183	"	磨製石斧	7.50	5.90	3.70	250.00	砂岩	
184	"	磨製石斧	6.80	5.10	2.50	148.00	砂岩	
185	"	凹石	8.80	7.85	4.20	310.00	砂岩	
186	"	凹石	9.30	8.40	6.60	785.00	砂岩	
187	"	砸石	8.10	7.00	1.50	145.00	砂岩	
188	"	砸石	9.30	7.20	1.90	210.00	砂岩	
189	"	敲石	12.20	5.00	4.20	365.00	砂岩	
190	"	磨製石斧	9.20	5.50	2.75	215.00	砂岩	
191	"	"	11.24	4.90	4.20	410.00	砂岩	
192	"	"	6.55	3.80	3.40	105.96	砂岩	
193	"	環状石斧	9.90	4.70	2.50	138.00	頁岩	



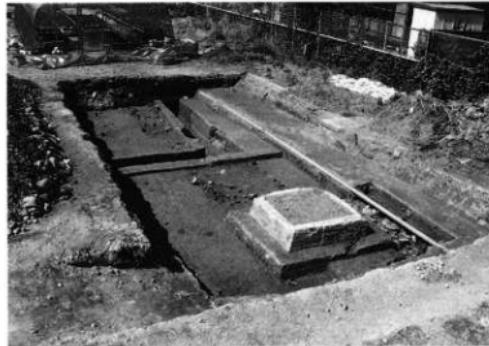




図版 1 宮崎小学校遺跡全景（西から）



図版2 A区調査着手前



図版3 A区1号溝状遺構遺物出土状況



図版4 A区2号溝状遺構遺物出土状況



図版5 A区1号溝状造構炭化物及び
遺物出土状況



図版6 A区完掘状況



図版7 調査風景



図版8 B区調査着手前



図版9 B区1号溝状遺構遺物出土状況(1)



図版10 B区1号溝状遺構遺物出土状況(2)



圖版11 B區遺物出土狀況(1)



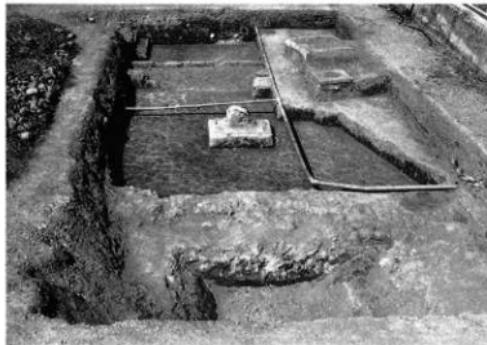
圖版12 B區遺物出土狀況(2)



圖版13 B區遺物出土狀況(3)



図版14 B区完掘状況



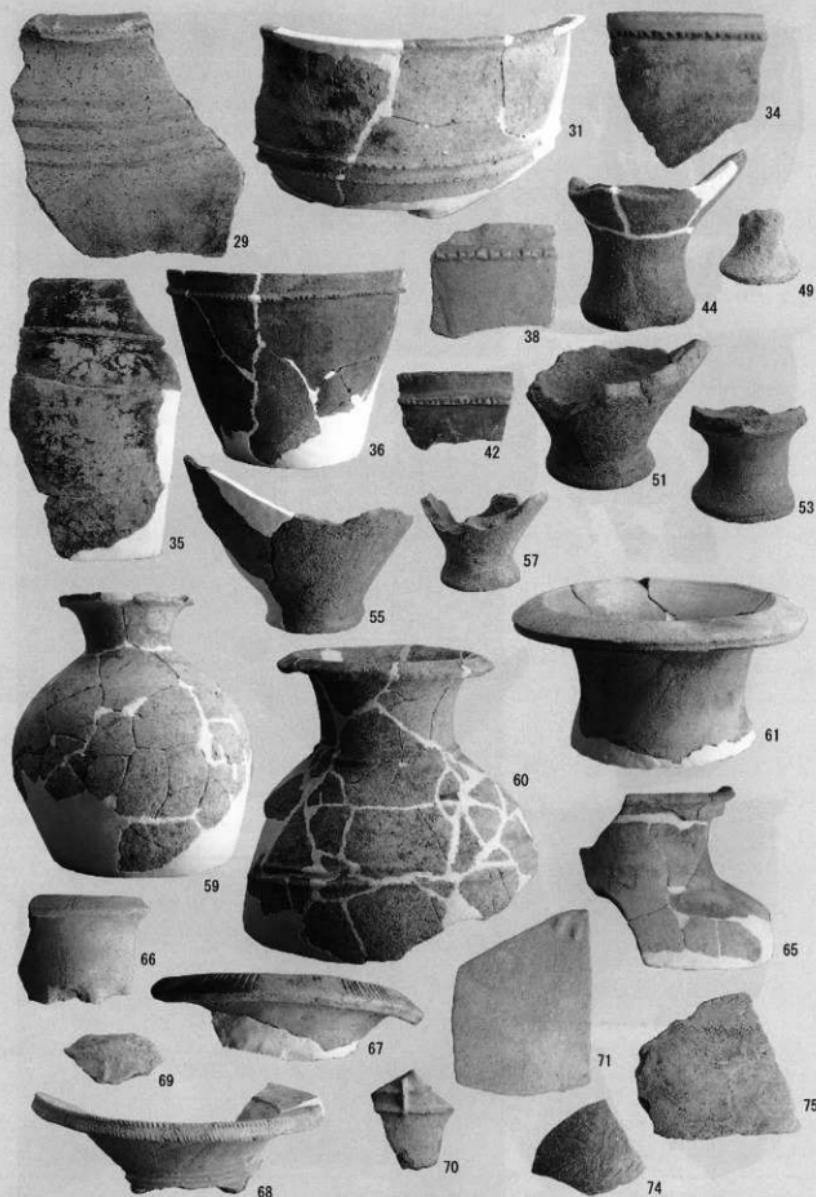
図版15 C区調査着手前



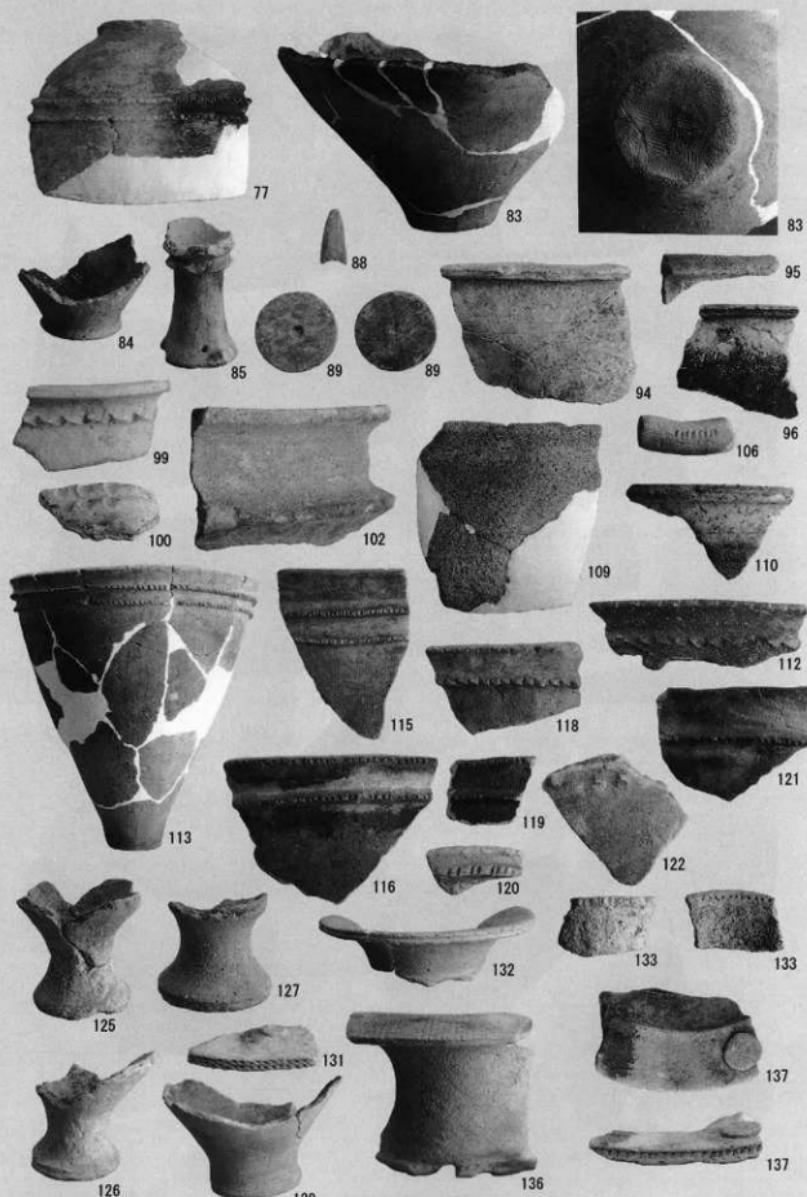
図版16 C区完掘状況



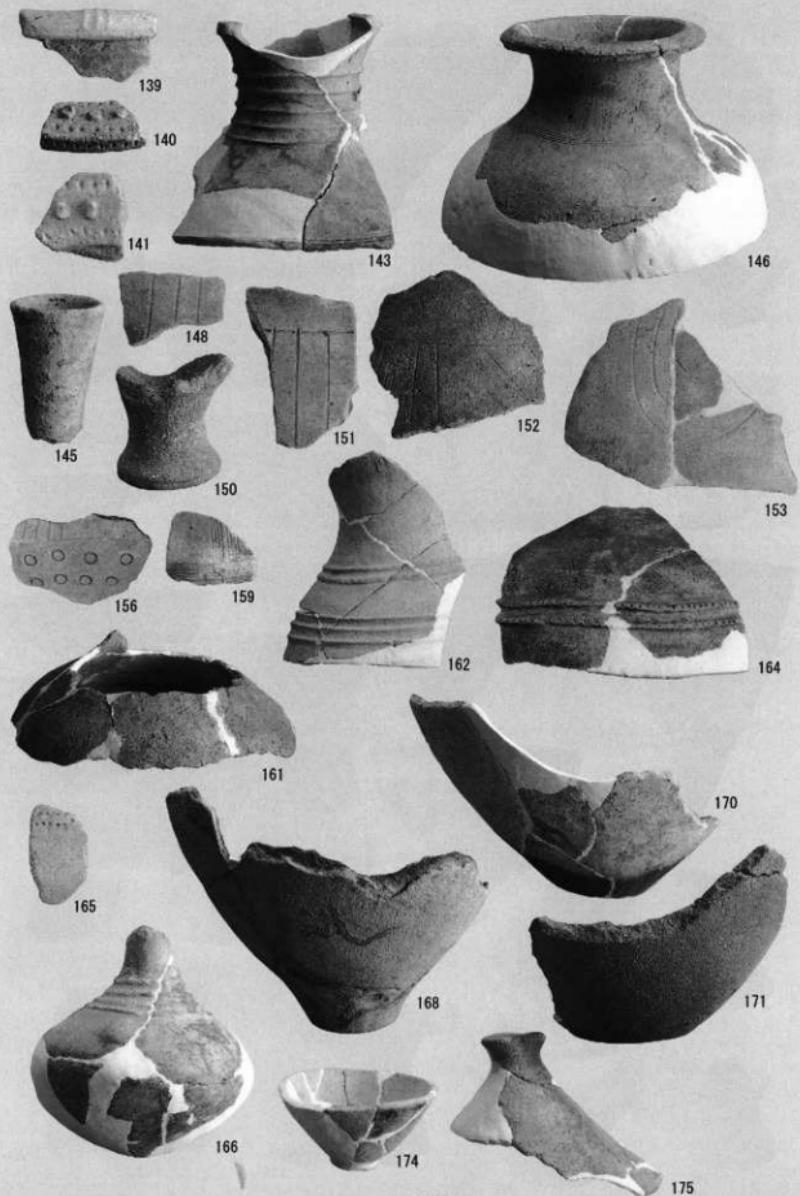
图版17 出土遗物(1)



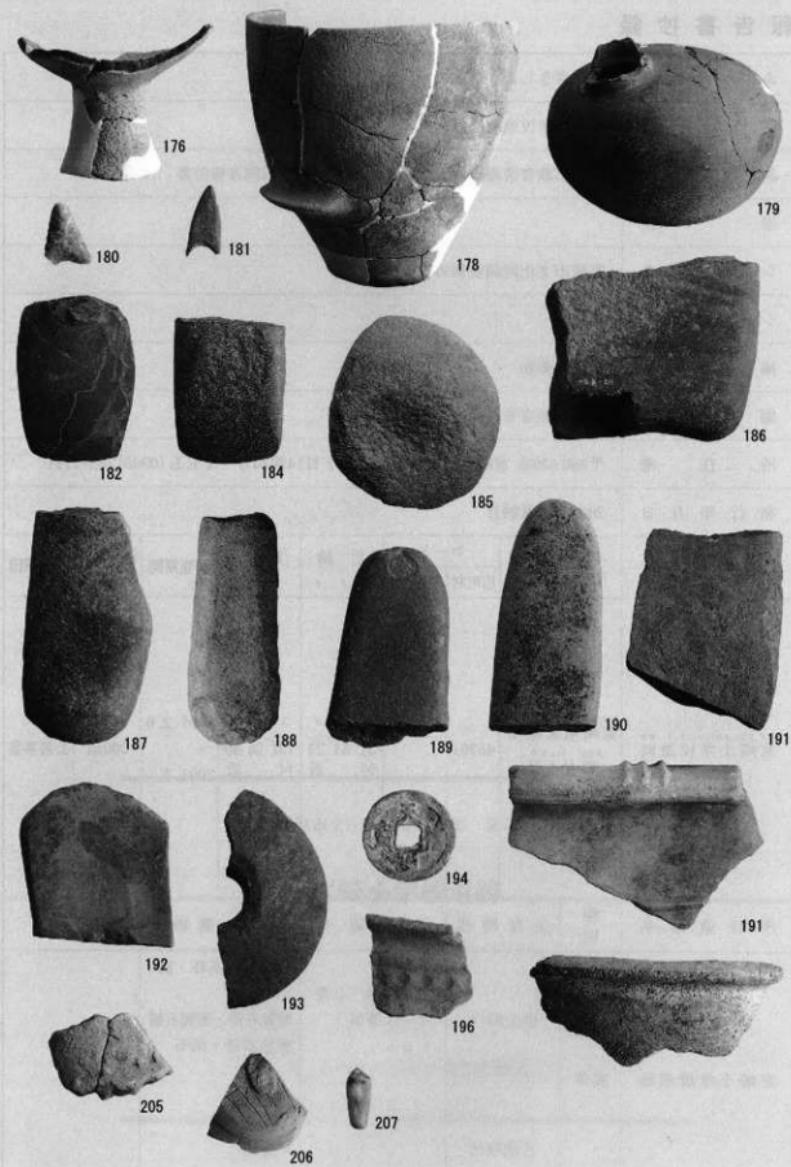
图版18 出土遗物(2)



図版19 出土遺物(3)



図版20 出土遺物(4)



图版21 出土遗物(5)

報告書抄録

ふりがな	みやざきしょうがっこういせき						
書名	宮崎小学校遺跡						
副書名	官崎市教育情報研修センター建設に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	官崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第53集						
編著者名	宇田川美和						
編集機関	官崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL(0985)25-2111						
発行年月日	2002年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯 。 / ° / ′ / ″	東經 。 / ° / ′ / ″	調査期間	測量面積 m ²	調査原因
みやざきしょうがっこくいせき 宮崎小学校遺跡	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 あさひ もとうか 施1丁目	45201	31°54'24" 付	131°25'40" 近	2001.2.6 ～ 2001.4.	300m ²	公共事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮崎小学校遺跡	集落	弥生時代	溝状造構 2条 井戸状造構 ピット	壺・甕・高环・鉢 磨製石斧・磨製石鎌 環状石斧・砥石			
		古墳時代		須恵器			

宮崎市文化財調査報告書 第53集

宮崎小学校遺跡

2002年3月

発行 宮崎市教育委員会
